

## 六 方 遺 跡

一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道  
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 29 年 3 月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第417集

# ろ く ば う 六 方 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所による一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した、茨城県常総市六方遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代と平安時代の集落跡などが確認でき、その様相の一端が明らかになりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、常総市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 野口 通



## 例　　言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財團が平成25年度に発掘調査を実施した。茨城県常総市大生郷町字六方3732番地ほかに所在する六方遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成26年2月1日～平成26年3月31日

整理 平成28年12月1日～平成29年3月31日

3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長 酒井雄一

調　　査　　員 江原美奈子

調　　査　　員 佐藤一也

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員大久保芳紀が担当した。

5 本書の作成にあたり、製鉄・鍛冶、銅鑄造関連遺物については、たたら研究会委員・製鉄遺跡研究会代表である穴澤義功氏に御指導・御助言をいただいた。

6 第3号堅穴建物跡から出土した鉄製品1点（鎌）、第4号堅穴建物跡から出土した鉄製品1点（鎌）、第7号堅穴建物跡から出土した鉄製品3点（不明）、第9号堅穴建物跡から出土した鉄製品3点（刀子）、第1号溝跡から出土した鉄製品1点（釘）の保存処理については、株式会社吉田生物研究所に委託した。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 8,040 m, Y = + 10,040 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C, … 西から東へ 1, 2, 3, … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c, … j, 西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット PG - ピット群 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 壑穴建物跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品

土層 K - 扰乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



焼土 炉・火床面・繊維土器



甕部材・粘土範囲



●土器

○土製品

□石器・石製品

△金属製品

—硬面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 壑穴建物跡の「主軸」は、炉・甕を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

- 7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたもののは以下のとおりである。

変更 SI 2 P 1 → PG 2 P 8	SI 2 P 3 → PG 2 P 9	SI 3 P 4 → PG 1 P 45
SI 3 P 5 → PG 1 P 46	SI 4 P 6 → PG 1 P 44	SI 4 P 7 → PG 1 P 40
SI 4 P 8 → PG 1 P 39	SI 5 P 2 → SK74	SI 5 P 8 → PG 1 P 43
SI 5 P 9 → PG 1 P 42	SI 5 P 10 → PG 1 P 41	SK32 → SI 6 P 2
SK35 → SI 6 P 5	SK29 → SI 6 P 7	SK41 → SI 6 P 10
SK34 → SI 6 P 13	SK30 → SI 6 P 14	SK33 → SI 6 P 15

SI 11 P 36 · 56 · 23 · 74 · 44 · 6 · 59 · SK52 · SI 11 P 31 · 28 · 67 · 71 · 25 · 11 · 3 · 4 ·  
60 → SI 11 P 1 ~ P 17

SI 11 P 49 · 58 · 62 · 73 · 18 · 15 · 27 · 1 · 7 · 47 · 50 · 35 · 30 · 38 · 66 · 20 · 21 · 24 · 43 ·  
51 → SI 15 P 1 ~ P 20

SI 11 P 32 · 61 · 64 · 2 · 77 · 75 · 9 · 10 · 45 · 8 · 5 · 78 · 46 · 48 · 72 · 65 · 57 · 34 · 68 · 70 ·  
33 · 69 · 37 · 63 · 39 · 40 · 41 · 42 · 17 · 16 · 54 · 55 · 19 · 22 · 29 · 12 · 13 · 14 · 52 · 53 · 76 ·  
26 → PG 5 P 1 ~ P 44

欠番 HG 1

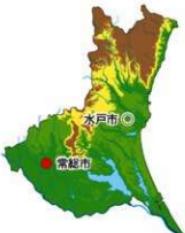
# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
六方遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	11
1 槩文時代の遺構と遺物	11
(1) 堅穴建物跡	11
(2) 土坑	22
2 平安時代の遺構と遺物	24
(1) 堅穴建物跡	24
(2) 土坑	48
3 その他の遺構と遺物	50
(1) 堅穴建物跡	50
(2) 道路跡	51
(3) 土坑	52
(4) 溝跡	59
(5) ピット群	62
(6) 遺構外出土遺物	63
第4節 まとめ	66
写真図版	PL 1 ~ PL12
抄 錄	
奥 付	

# 六方遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

六方遺跡は、常総市の中央部に位置し、西仁連川左岸の標高 19 m ほどの台地上に立地しています。一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道建設事業に先立ち、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 25 年度に、遺跡の南部に当たる 1989m<sup>2</sup>について発掘調査を行いました。



## 調査の内容

調査の結果、縄文時代と平安時代の集落跡を中心とした複合遺跡であることが分かりました。主な遺構として、縄文時代の堅穴建物跡 6 棟、平安時代の堅穴建物跡 8 棟などを確認しました。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶製品、石器・石製品、金属製品、製鉄・鍛冶関連遺物などです。



調査区遠景（南上空から）



調査区全景



平安時代の土器



出土した鉄滓



銅が付着した土師器と鋳型

## 調査の成果

縄文時代の集落跡は、出土した土器から、後期前葉（4000～3700年前）に営まれたことが分かりました。この他、前期から晩期にかけての土器片が出土しており、断続的に土地利用されていたと考えられます。

平安時代の集落跡は、9世紀後葉から10世紀前葉にかけて存続したと考えられます。堅穴建物跡の竈には、円筒埴輪片や切石を使用して補強したものが確認されました。集落の特徴の一つに、第12号堅穴建物跡の覆土から出土した、製鉄炉の炉壁や鉄滓があります。また、壇場に転用され銅が付着した土師器や鋳型なども出土しています。これらの出土遺物から、集落の一角で、製鉄や鍛冶、銅鑄造の作業を行っていたことが分かりました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所は、常総市において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業を進めている。

平成18年8月21日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無、及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成19年1月16・17日に現地踏査を、平成24年8月17・30日、9月4・11・26日、及び10月15日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成24年11月19日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に六方遺跡が所在すること、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成25年2月12日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成25年2月19日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成25年3月5日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成25年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、六方遺跡の発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年2月1日から平成26年3月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

六方遺跡の調査は、平成26年2月1日から3月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間		2月		3月	
調査準備 表記 土壠 確認						
遺構調査						
遺物洗浄 記録 写真整理						
撤収						

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

六方遺跡は、茨城県常総市大生郷町字六方 3732 番地ほかに所在している。

当遺跡が所在する常総市は、茨城県の南西部に位置している。市域を東側から小貝川、鬼怒川、西仁連川、飯沼川が南北に流れ、それらに注ぐ支流が縱横に流れている。地形は、鬼怒川を境に東部に低地が開け、西部に台地が発達している。東部の低地は、鬼怒川・小貝川の氾濫原に堆積した標高 12 m 前後の沖積平野で、河川堆積物である砂礫層や小貝川や鬼怒川の氾濫時に形成された厚い泥炭層の堆積層からなっている。西部に位置する台地は、結城市から常総市にかけて南北に延びる結城台地と、利根川に平行して古河市方面から取手市に延びる猿島台地に分けられる。結城台地は、当地域では、鬼怒川と旧飯沼によって区画され、幅約 2km、標高 20 ~ 24 m 前後の低地面や南に向かい傾斜する起伏の少ない台地である。台地の地質は、成田層を基盤に、竜ヶ崎砂疊層、常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。縱横に入り組んだ谷津は、繩文海進時には内湾を形成し、その後鬼怒川の自然堤防により、出口が閉塞されるに伴い排水不良となつた結果、形成された飯沼をはじめとする多くの沼沢が近世まで存在していた<sup>1)</sup>。

当遺跡は、東仁連川左岸の標高 19 m 前後で、西側を旧飯沼、南側から東側を旧飯沼からの谷津により区画された、幅 150m、長さ 400m ほどの南側に突き出た舌状台地上から台地縁辺部にかけて立地している。遺跡とその周囲の土地利用の現況は、主に台地上は畠地や山林として、低地は水田として利用されている。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡が所在する標高 20 m ほどの台地上には、鬼怒川や旧飯沼から谷津が複雑に進入し、谷津に面した台地縁辺部を中心に、多くの遺跡が確認されている。ここでは、周辺地域の遺跡について概要を述べる。

旧石器時代の遺物は、出土層位が明確ではないが、築地遺跡（39）からナイフ形石器が表採されている。

繩文時代には、早期から前期かけて気候の温暖化とともに、汀線が内陸深くまで進入する繩文海進が始まる。当地域も支谷の奥まで海進が進んだことが、台地上から縁辺部にかけて数多くの貝塚や遺跡が残されていくことから知られている。そのため、戦前から海進・海退による汀線の変動を理解する上で重要な地域と認識され、研究が進められてきた。貝柄山遺跡（34）は、花鳥貝塚として 1941 年に日本古代文化学会によって調査が行われ、早期の貝殻系痕文系土器とともにヤマトシジミを中心とする地点貝塚が確認されている<sup>2)</sup>。旧飯沼沿いでは、当遺跡の北約 5.2km に位置する鴨野山貝塚で関山式期の堅穴建物跡と地点貝塚が<sup>3)</sup>、西約 2.6km に位置する然山西遺跡で前期の堅穴建物跡や黒浜期の地点貝塚が確認されている<sup>4)</sup>。また、大生郷遺跡（9）では、黒浜式期の堅穴建物跡 10 棟が調査されている<sup>5)</sup>。中期の遺跡の確認数は減少するが、当遺跡周辺と満威遺跡（54）の周辺に遺跡の集中が見られる。当遺跡の東約 1.4km に位置する天土原道路（37）では阿玉台式 I b ~ II 式期の堅穴建物跡 4 棟が確認されている<sup>6)</sup>。後期から晩期にかけて、確認される遺跡はさらに減少する。金戸遺跡（2）内には昭和 40 年代の土取作業によって埋没した「大生郷貝塚」もしくは「金戸貝塚」と呼称される貝塚が存在し、オオタニシを主とし、後期の土器や骨角器、貝製品が出土している<sup>7)</sup>。築地遺跡は、戦前に大山史前学研究所が、戦後に慶應義塾高校が発掘を行っており、当財團が平成 26 年度に行った調

査において後・晩期における遺物包含層や多数の堅穴建物跡を確認し、多量の土器や土製品が出土している。

弥生時代の遺跡は、市域では数遺跡で土器片が表採されるのみで、近隣では天王原遺跡で確認されている。

古墳時代の遺跡は、後期に向かうほど台地上や谷津の奥部で確認される遺跡が増える傾向が見られる。集落として、大生郷遺跡で前期の堅穴建物跡 12 棟が調査されている。また、下花田古墳群（33）は 10 基前後の円墳からなる後期の群集墳と考えられている。

奈良・平安時代の当地域は、下総国岡田郡飯猪郷に属していたと考えられている。岡田郡衙の場所は不詳であるが、当遺跡から北約 6.5km に位置する常総市岡田・国生地区が有力視されている。地区内の国生 本屋敷遺跡は、1988 年に旧石下町によって調査が行われている。堅穴建物跡 28 棟のほか、方形に巡る断面逆台形状の大溝を確認し、「丈」の墨書き土器や朱書き土器が出土している<sup>8)</sup>。その後、1988 年の国立歴史民俗博物館による調査によって、大溝は古墳時代前期の豪族居館を闇録する場であることが確認された。また、7 世紀後半の方形に巡る溝跡と掘立柱建物跡が確認され、初期官衙的な性格付けがされている<sup>9)</sup>。周辺には延喜式内社に比定される桑原神社もあり、有力な都衙候補地である。当遺跡の周辺では、古墳時代から継続する遺跡と新たに成立する遺跡が見られる。当遺跡周辺の調査事例としては、奈良時代の堅穴建物跡を大生郷遺跡で 6 棟、濱倉北遺跡（56）で 2 棟調査<sup>10)</sup>されている。当遺跡から東約 0.7km に位置する宮原前遺跡（5）では、堅穴建物跡 34 棟を確認し、集落は 8 世紀初頭に成立し 9 世紀中葉には終焉している。律令制と消長をともにした集落であり、郷内における中心的な集落と考えられている<sup>11)</sup>。9 世紀頃から鬼怒川と小貝川の間の低地の開発が進み、延喜 4 年（904）には、豊田郡に改称されている。桓武平氏の一族が土着し未墾地を開拓し、努力を伸ばす中で争いも起こり、当地域を戦場にした平将門の乱は、数多くの伝説を残している。

中世になると、当地域は豊田莊に属して、常陸平氏の一族である豊田氏の興亡に大きな影響を受けている。中世を通して存続した豊田氏は、天文 3 年（1575）に下妻城主の多賀谷氏に滅ぼされる。古河木城跡（15）は、豊田氏家臣でのちに多賀谷氏に属した渡辺氏の居城とされている。その後、当地域は北上する後北条氏との最前線となり、後北条氏方の馬場遺跡（49）「人生塙跡」をめぐり攻防戦が繰り広げられた。

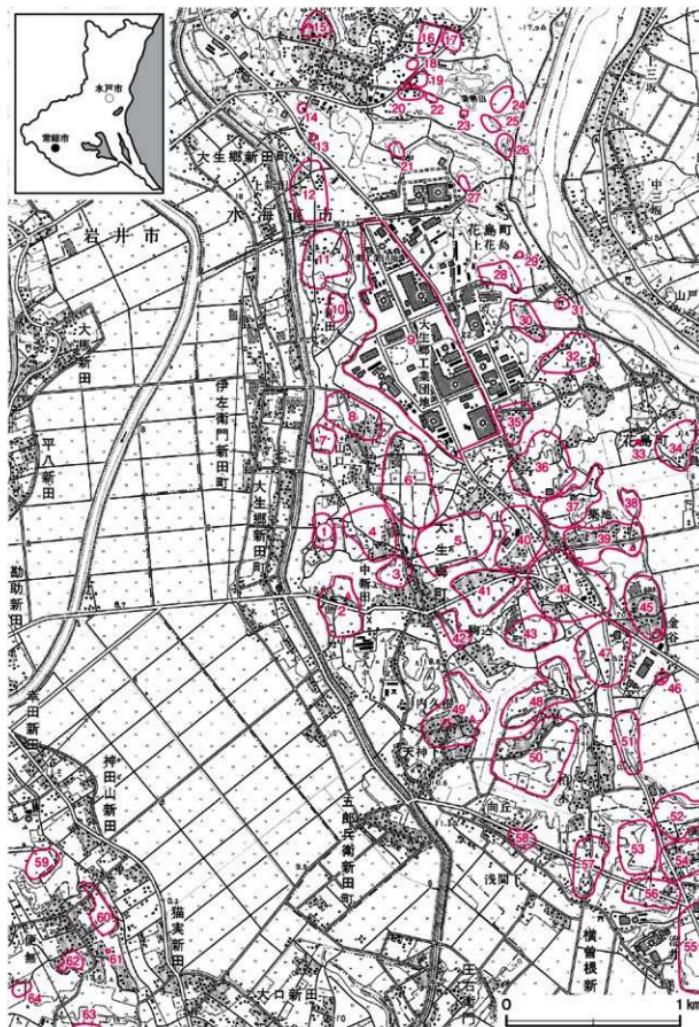
関ケ原の戦い後、西軍にいた多賀谷氏は領地を没収されることになる。以後、当地域は天領や旗本領が交錯して支配されるようになる。万治元年（1658）、土井利直が 1 万石の領地を得て立藩し、大輪村に陣屋（45）を置き大輪藩が成立するが、一代で廃藩になる。享保 9 年（1724）から始められた飯沼の干拓は、享保 13 年（1728）に一応の完成を見るが、その後も荒廃と再開発が繰り返され、現在では広大な水田地帯が広がっている。

#### 註

- 1) 水海道市編さん委員会編『水海道市史 上巻』水海道市 1984 年 3 月
- 2) 江坂輝弥「貝殿山貝塚」茨城県資料 考古資料編 先土器・绳文時代 茨城県 1979 年 3 月
- 3) 佐藤誠 常松成人 矢野文明「鴻山貝塚発掘調査報告書」「石下町史資料」第 2 集 石下町史編纂室 1987 年 3 月
- 4) 小川實行 田村櫻樹 佐藤一也「然山西遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 第 379 集 2013 年 3 月
- 5) 板井二郎「大生郷工農団地内埋蔵文化財調査報告書 - 大生郷遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 第 181 年 6 月
- 6) 小川實行「天王原遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 第 371 集 2013 年 3 月
- 7) 註 1 と同じ
- 8) 川井正一他「国生本屋敷遺跡発掘調査報告書」「石下町史資料」第 1 集 石下町史編纂室 1987 年 3 月
- 9) 阿部義平編「茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告書」「國立歴史民俗博物館研究報告」国立歴史民俗博物館 第 129 集 2006 年 3 月
- 10) 坂本勝彦「溝堀北道路跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 第 373 集 2013 年 3 月
- 11) 斎藤和浩「宮原前遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 第 335 集 2011 年 3 月

#### 参考文献

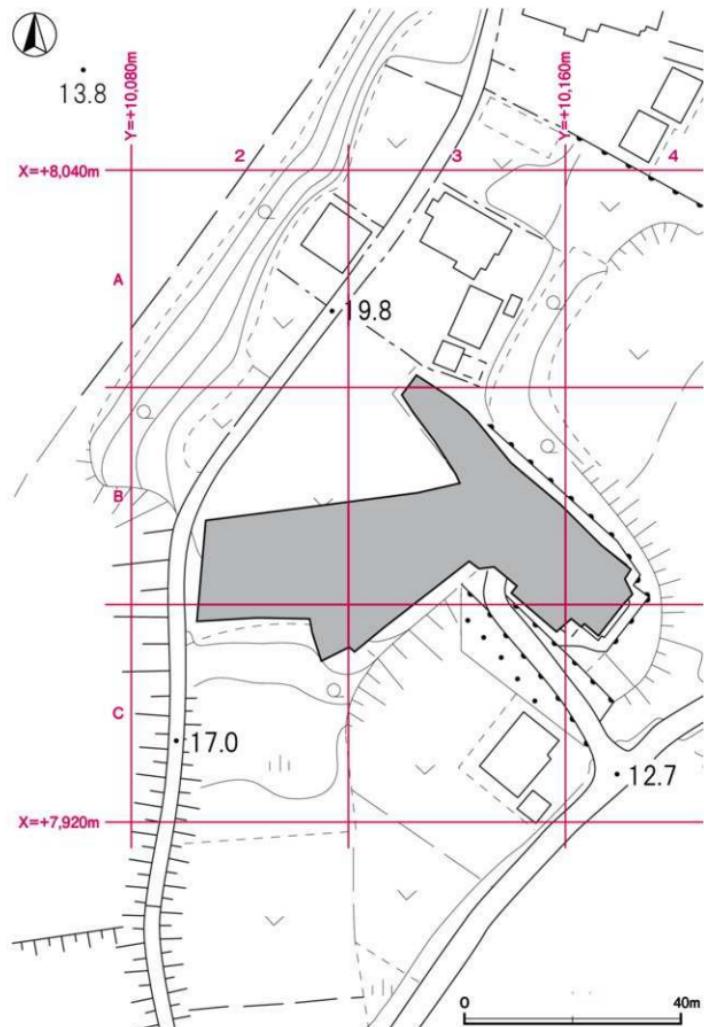
- 水海道市埋蔵文化財総合調査会「水海道市埋蔵文化財分布地図」水海道市 1992 年 3 月  
石下町史編纂委員会『石下町史』石下町 1988 年 3 月



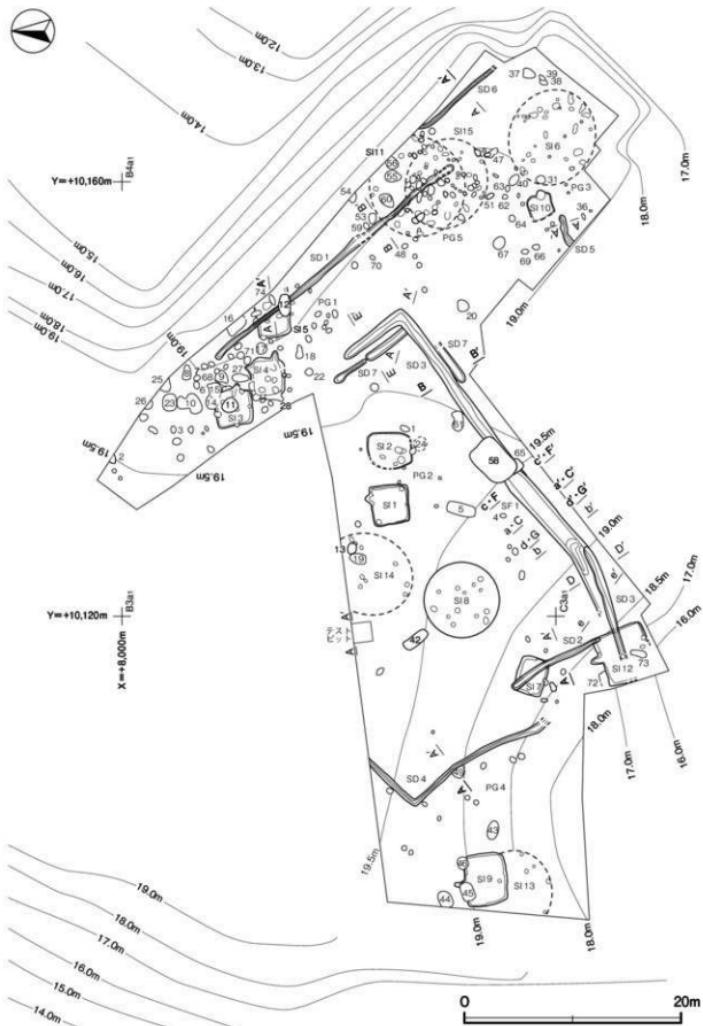
第1図 六方遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「水海道」）

表1 六方遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	六方遺跡	○		○○				33	下花鳥古墳群			○				
2	金戸遺跡	○		○○				34	貝柄山遺跡	○		○○○				
3	中新田遺跡	○		○○				35	大橋遺跡	○						
4	四ツ谷遺跡	○		○○				36	高野台遺跡			○				
5	宮原前遺跡	○		○○				37	天王原遺跡	○	○					
6	香取西遺跡	○		○○				38	天神山遺跡	○		○○				
7	山口遺跡	○		○○				39	榮地遺跡	○	○	○○				
8	前中丸遺跡	○		○○				40	大部堂遺跡	○		○○				
9	大生郷遺跡	○		○○				41	中根遺跡	○		○○				
10	後中丸南遺跡	○						42	芝崎遺跡	○		○				
11	後中丸北遺跡	○		○○				43	南袋遺跡	○		○○				
12	古間木前遺跡	○		○○				44	久保遺跡	○		○○				
13	山王B遺跡	○						45	大輪陣屋跡	○		○	○	○		
14	山王A遺跡						○	46	大日遺跡	○						
15	古間木城跡						○	47	榎下遺跡			○○				
16	坊山遺跡	○		○				48	小野台遺跡	○		○○				
17	山中遺跡	○		○				49	馬場遺跡	○		○○○	○			
18	稻荷遺跡	○						50	柏木遺跡	○		○○				
19	瀬内遺跡	○						51	大塚遺跡	○		○○				
20	大久保遺跡	○		○○				52	古寺家遺跡	○						
21	松山向遺跡					○		53	安戸東遺跡	○			○			
22	鎌田遺跡	○						54	満蔵遺跡	○		○○○				
23	寺田遺跡	○		○○				55	満倉東遺跡	○		○○○				
24	宮内遺跡	○		○○				56	満倉北遺跡	○		○○○				
25	四ツ木遺跡	○		○○			○	57	入山遺跡	○		○○○				
26	古間木遺跡	○				○		58	向山遺跡	○		○○○				
27	霜田向遺跡	○		○○				59	道休遺跡	○		○○				
28	雉子尾前遺跡	○		○○○				60	便無東遺跡	○		○○○				
29	雉子尾遺跡	○		○○○				61	便無塚遺跡	○				○		
30	鶴ヶ島遺跡					○○○		62	便無西遺跡	○						
31	香取遺跡	○		○○				63	栗ノ果遺跡	○		○○				
32	葉師西遺跡	○		○○○				64	大谷原遺跡	○						



第2図 六方遺跡調査区設定図（常総市都市計画図2,500分の1）



第3図 六方遺跡遺構全体図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

六方遺跡は、常総市の中央部に位置し、東仁連川左岸の標高約19mの台地上から縁辺部にかけて立地している。調査区は遺跡の南部にあたり、調査面積は1989m<sup>2</sup>で、調査前の現況は宅地・畠地である。

調査の結果、堅穴建物跡15棟（縄文時代6・平安時代8・時期不明1）、溝跡7条（時期不明）、土坑63基（縄文時代5・平安時代6・時期不明52）、道路跡1条（時期不明）、ピット群5か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に9箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢、浅鉢、壺）、土師器（壺、高台付壺、高台付輪、皿、壺、小形壺、瓶、ミニチュア土器）、須恵器（壺、蓋、壺）、土師質土器（小皿・鋸鉢）、陶器（碗）、土製品（土玉・支脚、紡錘車）、石器・石製品（鐵・磨石・凹石・砥石・支脚、紡錘車）、金属製品（刀子・鐵・鎌・釘・鐵砲玉）、炉堀、羽口、鉄滓（流动滓・炉内滓・含鉄滓）、椀形鍛冶滓、銅付着土器、鋳型、円筒埴輪などである。

### 第2節 基本層序

調査区中央部の台地平坦部（B20区）に設定し、深さ230mまで掘り下げ基本土層の確認を行った。

第1層は、現代の表土で、黒褐色を呈し、層厚は約15cmである。

第2層は、暗褐色を呈するローム漸移層で、炭化粒子を微量に含み、粘性・縮まりとともに普通である。層厚は15～23cmである。

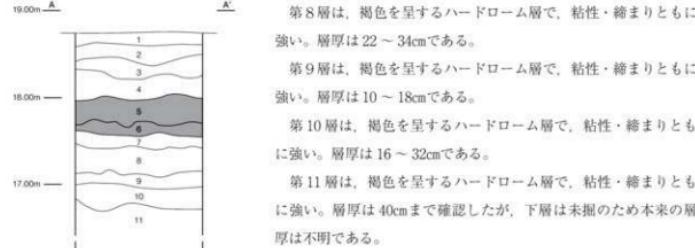
第3層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性・縮まりとともに普通である。層厚は8～24cmである。

第4層は、褐色を呈するハードロームへの漸移層で、粘性・縮まりとともに強い。層厚は18～35cmである。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層で、第2黒色帯の上部に相当すると考えられる。粘性・縮まりとともに普通である。層厚は22～36cmである。

第6層は、暗褐色を呈するハードローム層で、第2黒色帯の下部に相当すると考えられる。粘性・縮まりとともに強い。層厚は6～18cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・縮まりとともに強い。層厚は10～19cmである。



第4図 基本土層図

遺構は、第2層の上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡6棟、土坑5基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 堅穴建物跡

###### 第6号堅穴建物跡（第5・6図 PL 1）

位置 調査区東南部のB 4j1区、標高 19 m ほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 削平を受けているため、炉とピットしか確認できなかった。

重複関係 第31号土坑、第3号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が遺存していないため、本来の規模は不明である。ピットの配置から、長径 8.90 m、短径 7.90 m の橢円形で、長径方向は N - 68° - W と推定できる。

炉 中央部南東寄りに付設されている。長径 50 cm、短径 44 cm の楕円形で、確認面から 10 cm ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第1・2層を埋土し、第1層上面が炉床面である。炉床面は赤変しているが硬化は認められない。

###### 炉土層解説

1 赤 極色 燃土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 2 にい赤褐色 燃土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量

ピット 25か所。P 8～P 12・P 16～P 18は深さ 11～23 cm で、外周部に位置していることから、壁柱穴と考えられる。P 13～P 15は深さ 27～30 cm で、形状や配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 1～P 3は長径が 60～84 cm で、深さ 20～50 cm とほかのピットより規模が大きいが、性格は不明である。P 4～P 7・P 19～P 25は深さ 8～30 cm で、性格は不明である。

###### ピット土層解説（P 1）

1 極色 ローム粒子中量、燃土ブロック・炭化粒子微量  
2 極色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

###### ピット土層解説（P 3・P 4・P 6）

1 極色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
2 極色 ローム粒子中量  
3 極色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

###### ピット土層解説（P 2・P 5）

1 極色 ローム粒子少量、炭化粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
3 極色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

###### ピット土層解説（P 7）

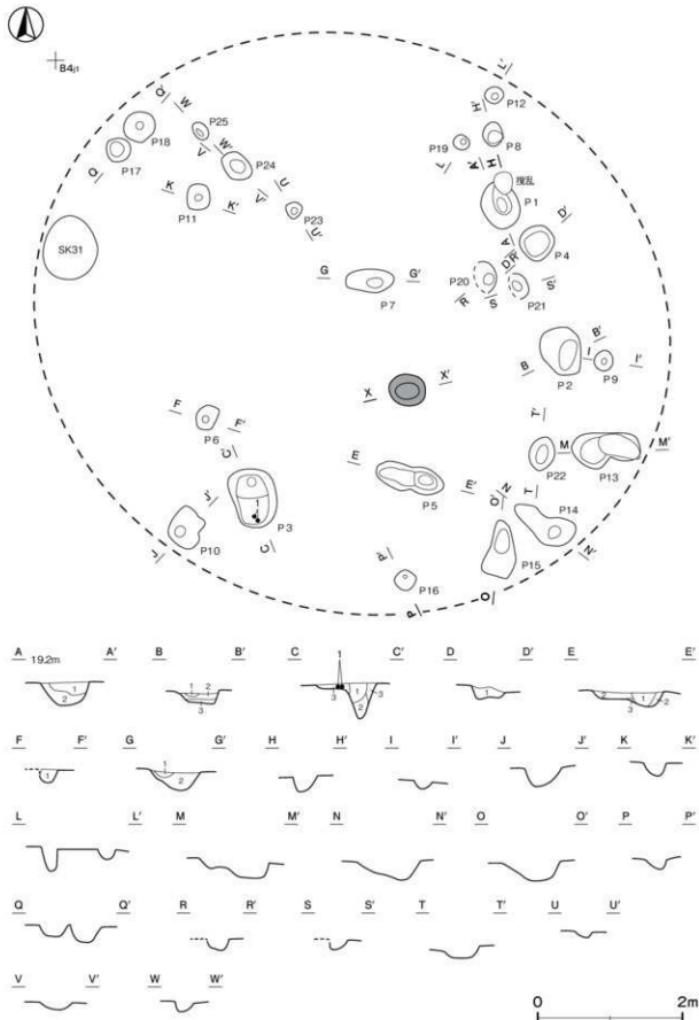
1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 確認面やピットから縄文土器片 33点（深鉢 32・壺 1）、石器 4点（磨石 2・砥石 2）が出土している。1はP 3の覆土中から、Q 1は確認面からそれぞれ出土している。

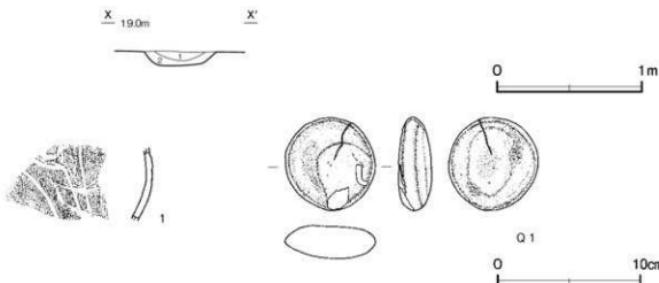
所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。

###### 第6号堅穴建物跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法	特徴	ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	壺	-	(5.1)	-	長石・石英	にい・赤	普通	洗浄による区分	4単位を1施文とする突刺文	P 3 覆土中	5% PL 7 施名古屋式	
Q 1	磨石	65	62	22	1189	安山岩	全面研磨	被熱により一部赤変			確認面	PL11	



第5図 第6号豎穴建物跡実測図



第6図 第6号竪穴建物跡・出土遺物実測図

#### 第8号竪穴建物跡（第7・8図）

位置 調査区中央部のB 2h0区、標高 19.5 m の台地斜面部に位置している。

規模と形状 暗褐色土の広がりから、径 6.90 m の円形と考えられる。

床 やや凹凸があり、硬化した部分は認められない。

炉 中央部やや南寄りに位置している。径 60 ~ 66cm のほぼ円形で、床面から 18cm ほど直状に掘りくぼめた地床炉である。第 1・2 層を埋土し、第 1 層上面が炉床面である。炉床面は赤変しており、硬化は弱い。

##### 炉土層解説

1 にぶい暗褐色 塗土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

2 黒 暗褐色 塗土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 13か所。P 5 ~ P 9 は深さ 10 ~ 26cm で、暗褐色土範囲の外周部に巡っていることから壁柱穴と考えられる。P 1 ~ P 4 は深さ 10 ~ 24cm で、炉の周辺に位置している。P 10 ~ P 13 は深さ 6 ~ 46cm で、性格は不明である。

##### ピット・土層解説（各ピット共通）

1 黒 暗色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 黒 暗色 ローム粒子中量、塗土粒子・炭化粒子微量

2 黒 暗色 ローム粒子中量

4 黒 暗色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

覆土 4 層に分層できる。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

##### 土層解説

1 黒 暗色 ローム粒子中量、塗土粒子・炭化粒子微量

3 明 暗色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

2 黒 暗色 ローム粒子中量、塗土粒子・炭化粒子微量

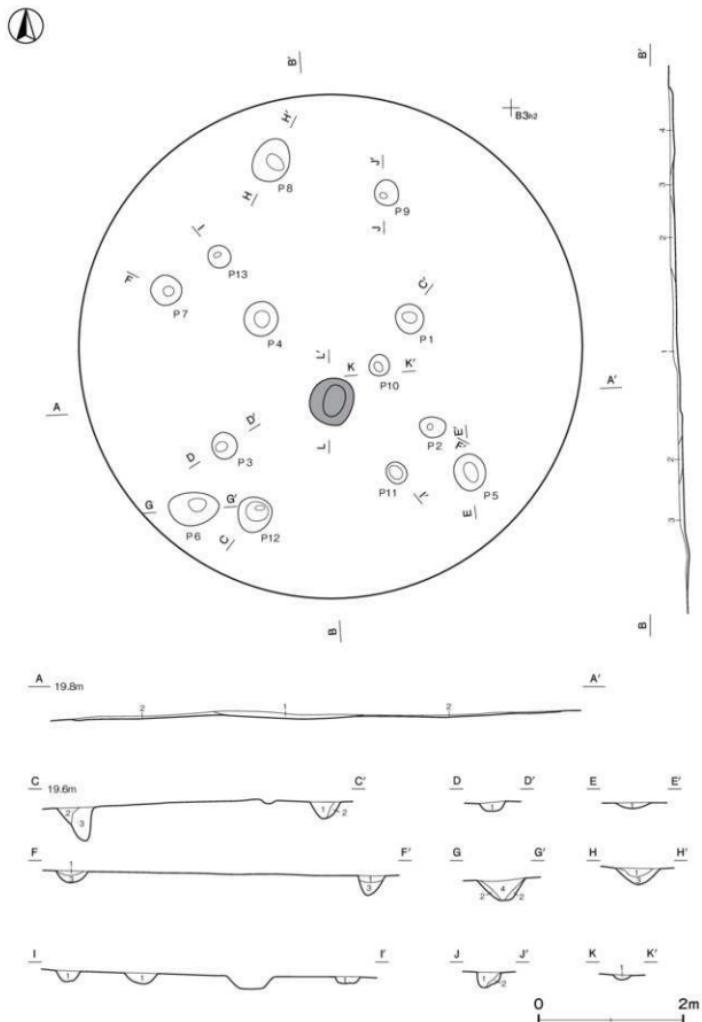
4 黒 暗色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片 20 点（深鉢）が暗褐色土中から出土しているほか、土師器片 1 点（高台付环）、金属製品 1 点（鉄砲玉）が混入している。2・3 は、覆土中から出土している。

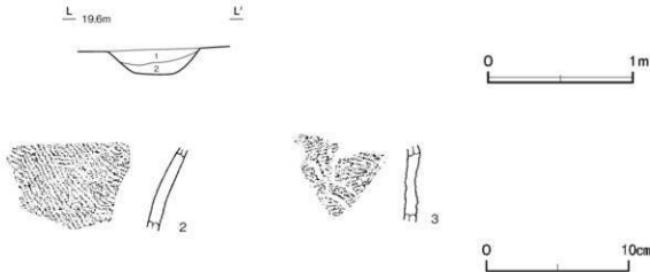
所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。

#### 第8号竪穴建物跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母・炭化粒子	明褐	普通	単路純丸 RL を横に施文	覆土中	5% PL 7
3	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	沈継による区画 単路純丸 RL を充填	覆土中	5% 称名寺式



第7図 第8号竪穴建物跡実測図



第8図 第8号竪穴建物跡・出土遺物実測図

### 第11号竪穴建物跡（第9・10図 PL 1）

**位置** 調査区東南部のB3g0区。標高19mほどの台地斜面部に位置している。

**確認状況** 削平を受けており、特に北半分は大きく削平されているため、炉とピットしか確認できなかった。

**重複関係** 第1号溝に掘り込まれている。第15号竪穴建物跡、第55・56・60号土坑、第5号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 燭が遺存しておらず、北東部は調査区域外に延びていると考えられ、本来の規模は不明である。ピットの配置から、径8.90mの円形と推定できる。

**炉** 2か所。中央部や南寄りに付設されている。炉1は、長径58cm、短径40cmの楕円形で、確認面から16cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第1・2層を埋土し、第1層上面が炉床面である。炉床面は赤変しているが硬化は弱い。炉2は、炉1に掘り込まれているため長径は85cmしか確認できなかった。短径は69cmで、楕円形である。確認面から35cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第1～4層を埋土し、第1層上面が炉床面である。炉床面は赤変しているが硬化は弱い。重複関係から、炉2から炉1に作り替えられている。

#### 土層解説（炉1）

1	赤	褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2	褐	色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量

#### 土層解説（炉2）

1	暗赤	褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
2	褐	色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
3	褐	色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐	色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量

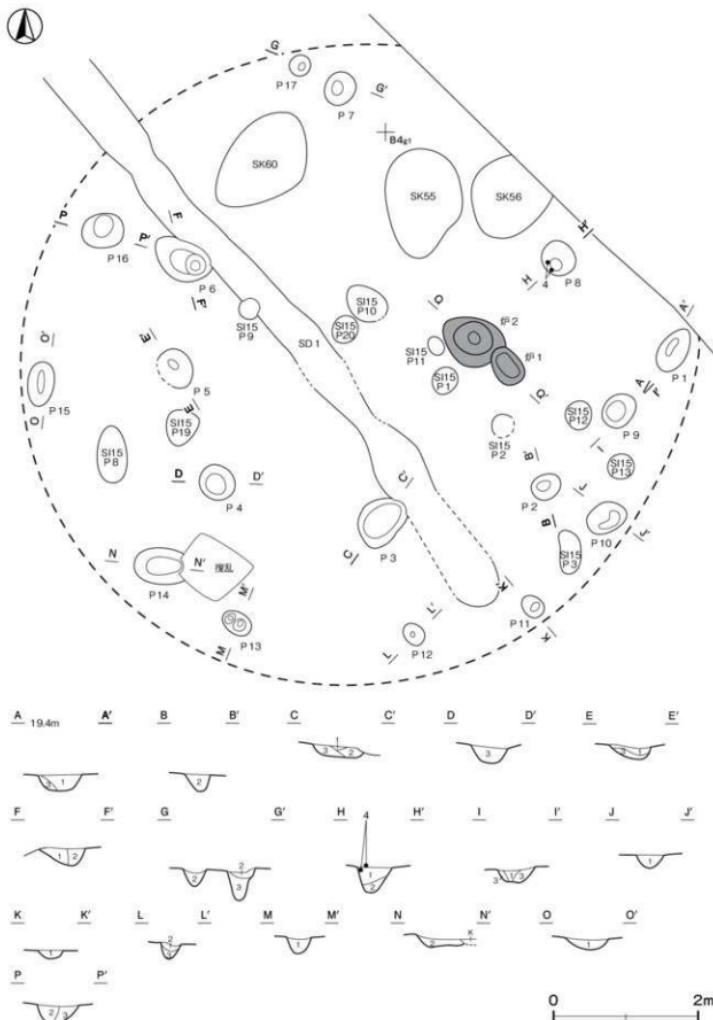
**ピット** 17か所。本跡の周辺では、多数のピットが確認されているが、円形に等間隔で巡っている配置と、覆土の様相や出土遺物などから、17か所のピットが伴うと考えられる。P1～P7は深さ14～38cmで、径7.10～7.40mの円形に巡っている。P8～P17は深さ10～34cmで、径8.20～8.90mの円形に巡っている。壁柱穴と考えられる2列のまとまりが確認されたことから、建て替えが想定される。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

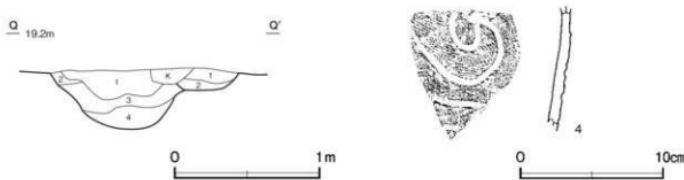
1	黒	褐	ロームブロック・炭化粒子微量
2	褐	褐	ロームブロック少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片27点（深鉢）、石器4点（磨石2・砥石1・不明1）が、各ピットから出土している。4はP8の覆土上層から出土している。

**所見** 炉と壁柱穴列が2か所ずつ確認されており、短期間に建て替えが行われている。壁柱穴列間で重複関係がなく、新旧関係は不明である。時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第9図 第11号竪穴建物跡実測図



第10図 第11号竪穴建物跡・出土遺物実測図

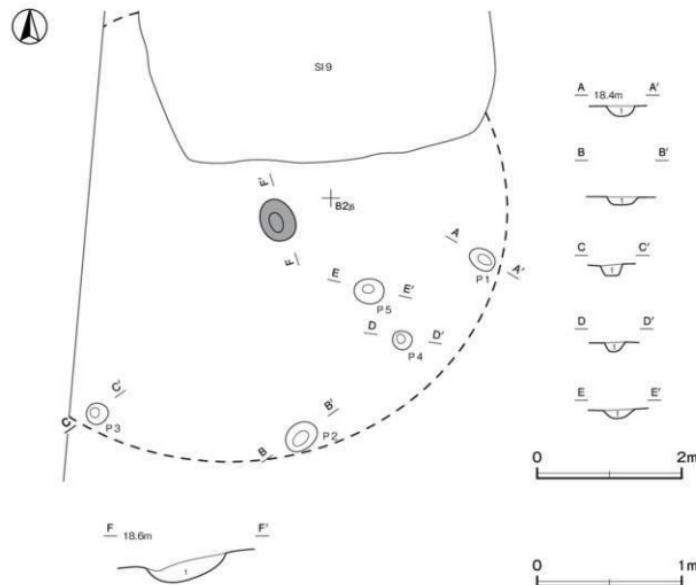
第11号竪穴建物跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	陶文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英	にふい粉	普通	洗濯による区画内を単脚縄文LRで充填	P 8覆土上層	5% PL 7 捺目市式

第13号竪穴建物跡（第11図）

位置 調査区東南部のB241区、標高18mほどの台地斜面部に位置している。

確認状況 削平を受けているため、炉とピットしか確認できなかった。



第11図 第13号竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第9号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 壁が遺存しておらず、北部を第9号竪穴建物に掘り込まれ、西部が調査区域外に延びているため、本来の規模は不明である。ピットの配置から、径5.80mほどの円形と推定できる。

**炉** 中央部に付設されている。長径61cm、短径49cmの楕円形で、確認面から15cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第1層は埋土で、炉床面は削平されている。

#### 炉土層解説

1 に赤褐色、ローム粒子中量、焼土ブロック少量

**ピット** 5か所。P1～P3は深さ12～14cmで、弧状に並んでいることから壁柱穴と考えられる。P4・P5は深さ12cm・13cmで、性格は不明である。

#### ピット土層解説 (P1・2・4・5)

1 焙 色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量

#### ピット土層解説 (P3)

1 焙 色 ロームブロック少量、炭化物微量

**遺物出土状況** 繩文土器片2点(深鉢)が、確認面と炉の覆土中からそれぞれ出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、出土遺物が細片のため特定できないが、遺構の様相から、縄文時代と考えられる。

### 第14号竪穴建物跡 (第12図)

**位置** 調査区中央部のB3fl区、標高19.5mほどの台地平坦部に位置している。

**確認状況** 削平を受けているため、炉とピットしか確認できなかった。

**重複関係** 第13・19号土坑、第2号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 壁が遺存しておらず、北部が調査区域外に延びるために、本来の規模は不明である。南北軸8.40m、東西軸7.40mほどの楕円形で、南北軸方向はN-19°-Eと推定できる。

**炉** 中央部南寄りに付設されている。長径110cm、短径80cmの楕円形で、確認面から18cmほど皿状に掘りくぼめられている。炉床面の西寄りに長径55cm、短径45cm、深さ14cmのピット状の凹みが確認できた。土器は出土していないが、土器埋設炉の痕跡と考えられる。4層に分層でき、第2～4層は覆土と考えられる。底面の中央部から東寄りに赤変硬化が著しい箇所が確認され、炉床面と考えられる。

#### 炉土層解説

1 焙 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 焙 色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

2 焙 色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 4 焙 色 ローム粒子・焼土粒子少量

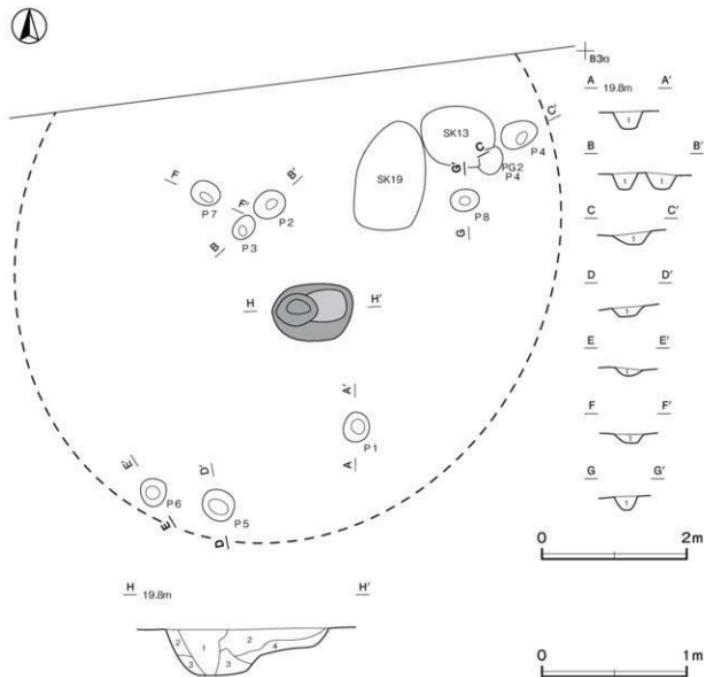
**ピット** 8か所。P4～P6は深さ13～15cmで、弧状に巡ることから壁柱穴と考えられる。P1・P2は深さ22cm・18cmで、炉を挟んで位置している。P3・P7・P8は深さ13～21cmで、性格は不明である。

#### ピット土層解説 (各ピット共通)

1 焙 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片2点(深鉢)が確認面から出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 時期は、出土遺物が細片のため特定できないが、遺構の様相から、縄文時代と考えられる。



第12図 第14号竪穴建物跡実測図

### 第15号竪穴建物跡（第13・14図 PL.1）

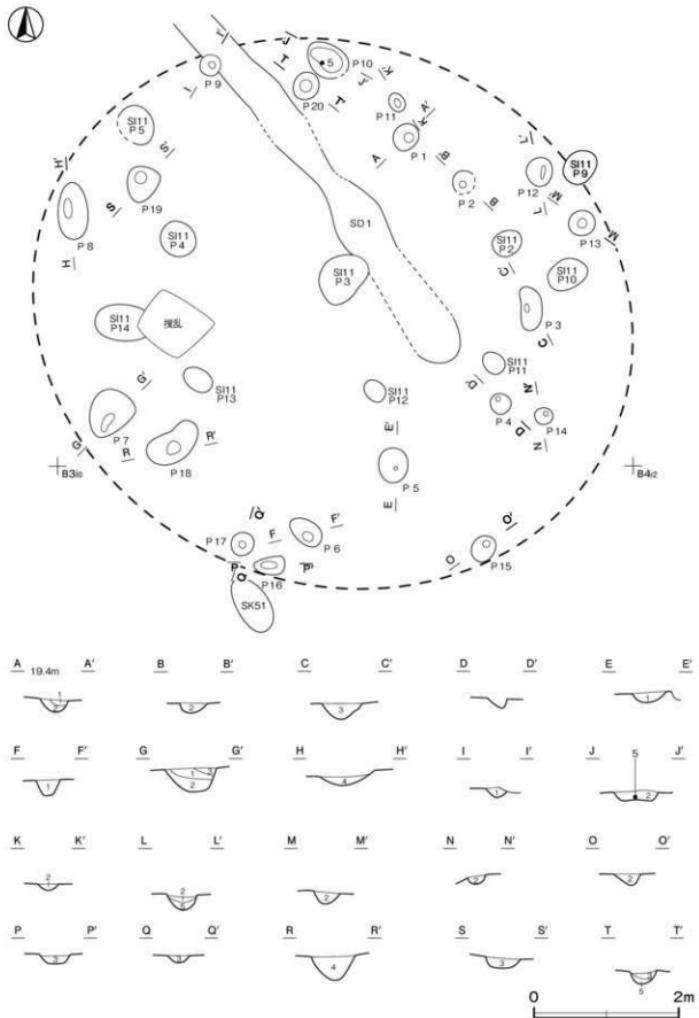
**位置** 調査区中央部東寄りのB3g0区、標高19.8mほどの台地斜面部に位置している。

**確認状況** 削平を受けているため、ピットしか確認できなかった。

**重複関係** 第1号溝に掘り込まれている。第11号竪穴建物跡、第51号土坑、第5号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 突が遺存していないため、本来の規模は不明である。ピットの配置から長径8.30m、短径7.60mの楕円形で、長径方向はN-40°-Wと推定できる。

**ピット** 20か所。本跡の周辺では、多数のピットが確認されているが、円形に等間隔で巡っている配置と、覆土の様相や出土遺物などから、20か所のピットが伴うと考えられる。P1～P10は深さ12～34cmで、径6.96～7.30mの円形に巡っている。P11～P20は深さ9～32cmで、径7.50mほどの円形に巡っている。壁穴と考えられる2列のまとまりが確認されたことから、建て替えが想定される。



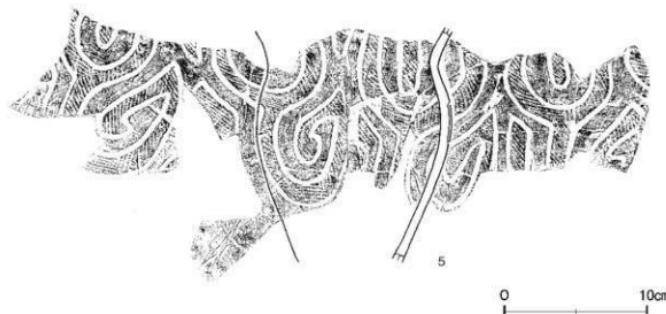
第13図 第15号豎穴建物跡実測図

**ピット土層解説（各ピット共通）**

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1 細 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 黒 褐 色 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量     |
| 3 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量 |                          |

**遺物出土状況** 楩文土器片 16 点（深鉢）が、各ピットから出土している。5 は、P 10 の底面から逆位で据え置かれた状態で出土している。

**所見** 円形に巡る壁柱穴が 2 列確認されており、短期間に建て替えが行われている。壁柱穴列間に重複関係がなく、新旧関係は不明である。時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第 14 図 第 15 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 15 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 14 図）

番号	種別	器種	口径	深さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	楢文土器	深鉢	-	[16.3]	-	長石・石英・雲母 に赤い粉 普通	直燃による区画 単筋織文 LR の丸頂部と無文 底を交互に配置	P 10 底面	50% PG 1.7 佐名寺上式	

表 2 楩文時代竪穴建物跡一覧表

番号	從属	長軸方向	平面形 長径×短径 (m)	壁高 (cm)	床面	壁構 柱孔 窓孔 出入口	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考	
							壁	床	梁					
6	B 4.1	N - 68° - W	[円形] [8.90] × [7.90]	-	-	-	3	22	1	-	楢文土器、石器	後期前葉	SK 31, PG 3 新羽 2号	
8	B 2.60	-	[円形] [6.90] × [6.90]	-	-	-	-	13	1	-	不明	楢文土器	後期前葉	
11	B 3.60	-	[円形] [8.90] × [8.90]	-	-	-	-	17	2	-	楢文土器、石器	後期前葉	未記→SD 1 SI 15 SK 53-56-60, PG 5 新羽不明	
13	B 2.14	-	[円形] [5.80] × [5.80]	-	-	-	-	5	1	-	楢文土器	楢文時代	未記→SI 1 不明	
14	B 3.11	N - 19° - E	[角円形] [8.40] × [7.40]	-	-	-	-	8	1	-	楢文土器	楢文時代	SK 13 - 19, PG 2 未記→SD 4 不明	
15	B 3.60	N - 40° - W	[角円形] [8.30] × [7.60]	-	-	-	-	20	-	-	楢文土器	後期前葉	未記→SD 1 SI 11 SK 51, PG 5 新羽 2号	

## (2) 土坑

当時代と考えられる土坑5基を確認した。そのうち、2基については本文と実測図で解説する。その他の土坑については、実測図(第17図)と土層解説、一覧表で掲載する。

### 第13号土坑(第15図)

**位置** 調査区中央部のB 342区、標高19.5mの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第2号ピット群P 4に掘り込まれている。第14号竪穴建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 長径1.07m、短径0.83mの楕円形で、長径方向はN-69°-Wである。深さは24cmで、底面は皿状である。壁は外傾もしくは緩やかに傾斜している。

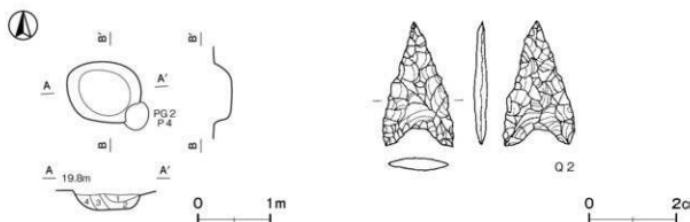
**覆土** 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 埋 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 埋 色 ロームブロック・炭化粒子少量
2 埋 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 埋 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 石器1点(縛)が覆土中から出土している。

**所見** 性格は不明である。時期は、出土遺物から縄文時代と考えられる。



第15図 第13号土坑・出土遺物実測図

### 第13号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
							等級	基準		
Q 2	縛	18	16	0.3	105	チャート	四基無基準	両面押刃刃端	覆土中	PL11

### 第24号土坑(第16図 PL 2)

**位置** 調査区中央部のB 344区、標高19mほどの台地平坦面に位置している。

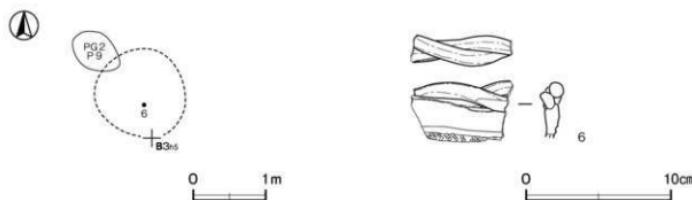
**確認状況** 道構確認面において、縄文土器片の散布が確認できた。付近を精査し、断ち割りを行ったが、掘り込みは認められなかったことから、土坑の底面と判断した。

**重複関係** 第2号ピット群P 9と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 縛が遺存していないため本来の規模は不明である。土器片の分布範囲は、径120mほどの円形と推定できる。

**遺物出土状況** 繩文土器片 21 点(深鉢)が、確認面から出土している。6 を含む土器片 19 点は、中央部からまとまって出土しているが、接合関係は認められなかった。

**所見** 時期は、出土土器から後期前葉に比定できる。



第 16 図 第 24 号土坑・出土遺物実測図

第 24 号土坑出土遺物観察表 (第 16 図)

番号	種 別	形種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
6	縄文土器	深鉢	-	(38)	-	長石・石英	棕	普通	口縁部上端 2 本の粘土紐を文垂させ装飾	縄造面 5% PL 7 株名寺丁式	

#### 第 37 号土坑土層解説

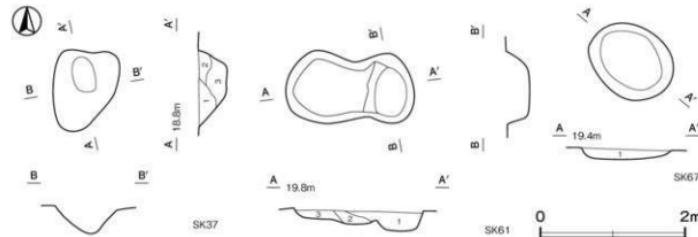
- 1 白 細 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒 細 色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 3 黒 細 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

#### 第 67 号土坑土層解説

- 1 白 細 色 ロームブロック・炭化粒子微量

#### 第 61 号土坑土層解説

- 1 白 細 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 白 細 色 炭化粒子多量、ローム粒子中量
- 3 黑 細 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量



第 17 図 縄文時代土坑実測図

表3 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
13	B 3f2	N - 69° - W	椭円形	1.07 × 0.83	24	外傾 緩斜	圓状	人為	石器(鉗)	PG 2 P 4 → 本編 SL 14 前田不明
24	B 3g4	-	【円形】	[1.20] × [1.20]	-	-	-	-	縄文土器(漆鉢)	PG 2 P 9 前田不明
37	B 4 J3	N - 27° - E	椭円形	1.23 × 0.88	37	外傾 平坦	人為	縄文土器(漆鉢)、焼成粘土塊		
61	B 3h5	N - 86° - W	椭円形	1.28 × 0.98	30	緩斜 外傾	凹凸	人為	縄文土器(漆鉢)	
67	B 3i9	N - 52° - W	椭円形	1.25 × 0.79	48	緩斜	平坦	人為	縄文土器(漆鉢)	

## 2 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡8棟、土坑6基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

## (1) 堅穴建物跡

## 第1号堅穴建物跡 (第18・19図 PL 2)

位置 調査区中央部のB 3g3区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.64m、短軸3.42mの方形で、主軸方向はN - 6° - Wである。壁は高さ16~32cmで、外傾している。

床 平坦で、硬化した部分は認められない。北壁及び西壁の一部を除く壁下には、壁溝が巡っている。中央部で焼土の広がりが確認でき、床面の一部が赤変している。壁際には、炭化材が散在している。

竈 北壁の東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cmで、燃焼部幅は52cmである。わずかに残存している袖部は、地山を掘り残して基部とし、粘土を貼り付けて構築されている。火床面は、床面とほぼ同じ高さを使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から奥壁で段を有しながら外傾している。

## 竈土層解説

1 黒褐色	燒土アロック、炭化物、ローム粒子・粘土粒子微量	7 黒褐色	粘土アロック中量、ロームアロック、炭化粒子少量、燒土アロック微量
2 黒褐色	燒土アロック、粘土ブロック、炭化物、ローム粒子微量	8 黒褐色	ロームアロック、燒土アロック、炭化物少量
3 暗褐色	燒土アロック少量、粘土ブロック、炭化物、ローム粒子微量	9 黒褐色	粘土粒子少量、燒土ブロック、炭化物・ローム粒子少量
4 暗褐色	ロームアロック少量、炭化粒子微量	10 黒褐色	粘土アロック少量、炭化物・ローム粒子・燒土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、燒土ブロック、燒土粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・燒土粒子・粘土粒子微量

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ18cm・22cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 3は深さ8cmで、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

## ピット土層解説 (P 1)

1 黒褐色	ロームアロック少量、炭化粒子微量	1 黑褐色	ロームアロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 黑褐色	ロームアロック・炭化粒子微量	2 黑褐色	ローム粒子微量、炭化粒子微量

## ピット土層解説 (P 2)

1 黑褐色	ロームアロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 黑褐色	ロームアロック・炭化粒子微量
3 黑褐色	ロームアロック少量、炭化粒子微量

覆土 7層に分層できる。ロームブロックや炭化物、焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

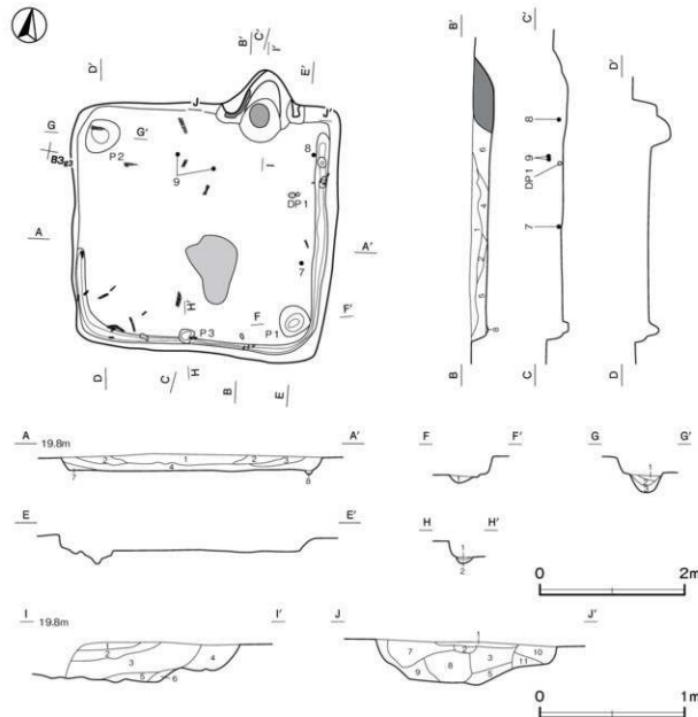
第8層は、壁溝の堆積土である。

**土層解説**

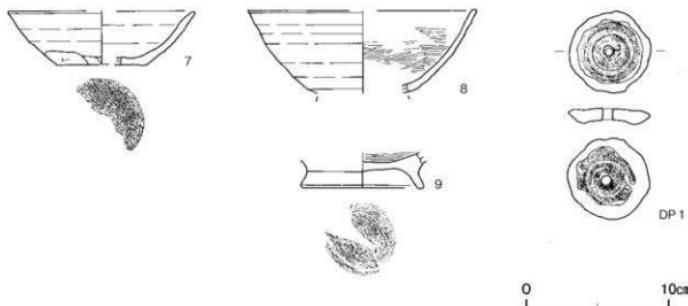
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	粘土ブロック少量・ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量・焼土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子中量・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量・炭化物・焼土粒子微量		
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量・炭化物微量		

**遺物出土状況** 土師器片9点(高台付环3、高台付榦2、甕4)、須恵器片5点(环)、土製品1点(紡錘車)、石器4点(砥石)のほか、繩文土器片51点(深鉢)、石器1点(磨製石斧)、剥片1点が出土している。遺物は全体に散在しており、特に東壁際の覆土中から多く出土しているため、東側から埋め戻しの過程で投棄されたものとみられる。DP 1は、床面から出土している。7・8は、東壁際の覆土下層～床面にかけて出土した破片が接合している。9は、北壁側の覆土上層から出土している。

**所見** 焼土の広がりや炭化材の出土から、焼失建物と考えられる。時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第18図 第1号竪穴建物跡実測図



第19図 第1号堅穴建物跡出土遺物実測図

第1号堅穴建物跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	口か	出土位置	備考
7	瓶	杯	[13.0]	3.8	[6.2]	長石・石英	にぶい緑	普通	傳型外底下端手持ちハラ削り	底部一方に向か	覆土下層～	20%
8	土師器	高台付陶	[15.6]	5.8	—	長石・石英・青母	明褐	普通	内面黒色処理	ハラ削き	高台部欠損	10%
9	土師器	高台付陶	—	(2.5)	8.0	長石・石英・青母	橙	普通	内面黒色処理	ハラ削き	底部ハラ削り	20%
DP 1	粘土車輪	—	5.7	0.7	1.1	36.7	長石・石英	灰褐	土師器底部転用	一方向からの穿孔	床面	PL10

第3号堅穴建物跡（第20～23図 PL 2・3）

位置 調査区中央部北側のB 3c5区、標高19mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第68号土坑を掘り込み、第11・14・15号土坑、第1号ピット群P45・P46に掘り込まれている。

規模と形状 東北東部が後世の造営や埋葬により壊されているが、長軸3.50m、短軸3.38mの方形で、主軸方向はN-88°-Wである。壁は高さ8～17cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には、壁溝が巡っている。中央部西寄りに焼上の広がりが確認でき、床面の一部が赤変している。

竈 東壁の南寄りに付設されている。規模は、突口部から煙道部まで131cmで、燃焼部幅は45cmである。袖部は、床面から深さ16～24cmの土坑状に掘り込み、凝灰質砂岩の切石を据えて第13層で埋土し、その後、切石の周間に第11・12層を積み上げて構築されている。火床部は、床面から20cmほど掘りくぼめ、第7～10層を埋土して構築されている。火床面は、第7層上面で火熱を受け赤変硬化している。煙道部は、壁外へ67cmほど掘り込まれ、外傾している。

#### 竈土層解説

- |        |                  |               |         |              |          |
|--------|------------------|---------------|---------|--------------|----------|
| 1 黒褐色  | 燒土ブロック中量         | ロームブロック・炭化粒子・ | 4 赤褐色   | 燒土ブロック多量     | 粘土ブロック少量 |
| 粘土粒子少量 |                  |               | 微量      |              |          |
| 2 噴褐色  | 燒土ブロック中量         | ロームブロック・炭化粒子・ | 5 にぶい褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量 | 燒土ブロック少量 |
| 粘土粒子少量 |                  |               | 炭化粒子微量  |              |          |
| 3 噴褐色  | ロームブロック・粘土ブロック微量 |               |         |              |          |

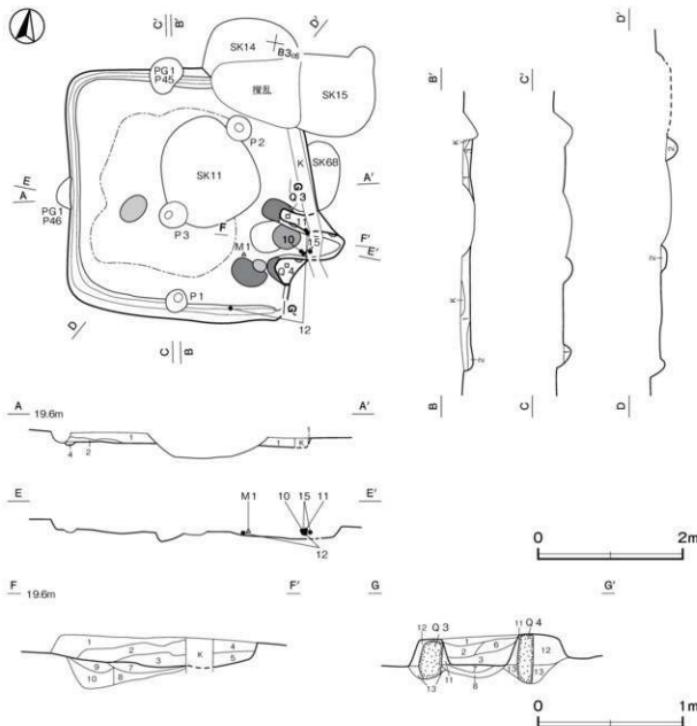
6	にぶい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量、炭化粒子少量	10	極暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
7	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量	11	赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
8	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	12	褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
9	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量	13	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

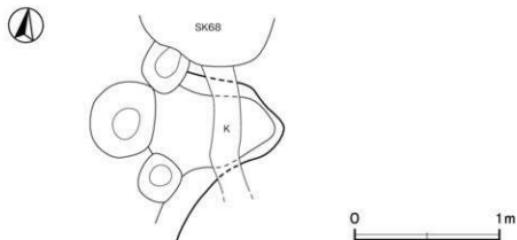
ピット 3か所。P 1は深さ10cmで、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 2・P 3はともに深さ16cmで、性格は不明である。

#### 土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色 ロームブロック中量

2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量





第21図 第3号堅穴建物跡実測図（2）

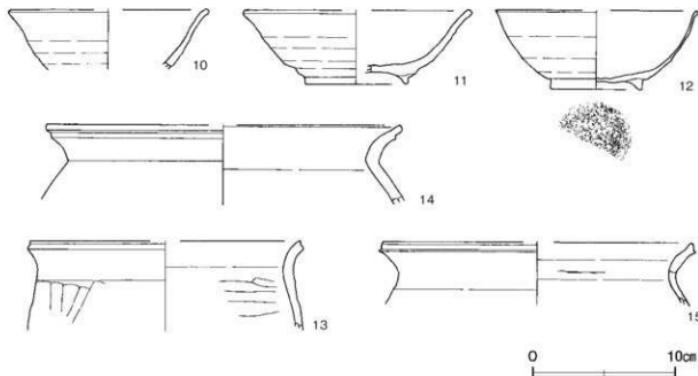
**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。第4層は、壁溝の堆積土である。

**土層解説**

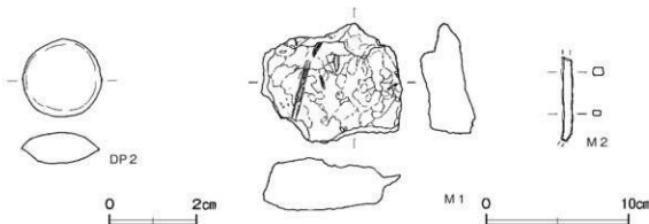
1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	3 白褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 白褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量	4 白褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片78点（高台付椀27、甕49、小形甕1、瓶1）、土製品1点（不明）、鉄製品2点（鐵、不明）、焼成粘土塊2点（214g）、炉壠4点（1588g）、椀形鍛冶滓1点（431.1g）のほか、繩文土器片5点（深鉢）が出土している。遺物は東部の覆土中、特に竈周辺の覆土下層から多く出土している。10・11・15は、竈の覆土下層から出土している。12は、竈の覆土下層と南壁際の床面にかけて出土した破片が接合したものである。M 1は、竈焚口部前の覆土下層から出土している。13・14・DP 2、M 2は、覆土中から出土している。

**所見** 炉壠や椀形鍛冶滓などの鉄製、鍛冶関連遺物が、覆土中から出土している。炉や鍛造剥片等は確認できなかったことから、周辺に鉄生産に関わる施設が存在しており、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。時期は、出土土器から10世紀前葉～中葉と考えられる。



第22図 第3号堅穴建物跡出土遺物実測図（1）



第23図 第3号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3号堅穴建物跡出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土器部	直口桶	[13.8]	(4.1)	-	長石・石英・赤色粘土	棕	普通	外・内面クロナダ	覆土下層	10% 次焼成
11	土器部	直口桶	[15.4]	5.1	[6.9]	長石・石英・赤色粘土	にぶい棕	普通	底部回転ペラ削り	覆土下層	40% PL 8
12	土器部	直口桶	[14.0]	5.6	6.4	長石・石英	にぶい棕	普通	底部ハケ削り 外・内面ともに摩滅	覆土下層	50% PL 8
13	土器部	小彫器	[18.8]	(6.2)	-	長石・石英・岩母	にぶい棕	普通	口縁部外・内面横ナダ 体部外側面位のペラ削り	覆土中	5% PL 8
14	土器部	彫	[24.4]	(5.5)	-	長石・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横位のペラナダ	覆土中	5%
15	土器部	彫	[21.4]	(4.4)	-	長石・石英	棕	普通	口縁部外・内面横位のペラナダ 内面輪積板	覆土下層	5%
番号	器種	最大径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
DP 2	不明	1.8	0.7	175	長石・石英	にぶい棕	片状 灰面摩滅		覆土中		
番号	器種	最大径	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q 3	鐵製葉材	(33.4)	(18.2)	(12.0)	(565.2)	凝灰質砂岩	八角柱状に成形 工具痕		左袖部内	鐵製表のみ PL 11	
Q 4	鐵製葉材	(32.0)	(11.0)	(10.5)	(496.2)	凝灰質砂岩	加工面あり 大燃により風化著しい		右袖部内	鐵製表のみ	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M 1	圓形鉢	83	97	3.6	(431.1)	鉄	上面わずかに発泡 本付着 下面浅い彫形		覆土下層	PL 12	
M 2	鉢	(5.9)	0.6	0.5	(4.6)	鉄	米部 円錐欠損 断面長方形		覆土中		

第4号堅穴建物跡(第24～26図 PL 3)

位置 調査区東南部のB 3 d6 区。標高 19.5 m の台地平坦部に位置している。

重複関係 第28号土坑、第1号ピット群P 39・P 40・P 44に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.77 m、短軸 3.13 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 92° - E である。壁は高さ 14～24 cm で、外傾している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下には、壁溝が全周している。貼床は、壁下と中央部を除いて深さ 5～9 cm ほど掘りくぼめ、粘土ブロックを含んだ第6層を埋土して構築されている。

竈 2か所。竈 1は、北壁の東寄りに付設されている。規模は、焚口部や袖部が残存していないため、火床面から煙道部までが 102 cm で、燃焼部幅が 50 cm しか確認できなかった。火床部は、床面から 15 cm ほど掘り込み、第8層を埋土して構築されている。火床面は、第8層上面で火熱を受けてわずかに赤変硬化している。煙道部は、壁外へ 58 cm ほど掘り込まれ、外傾している。煙道部の奥壁には、粘土粒子を含んだ第9層が貼りつけられて

いる。また、円筒埴輪片が竈の覆土から出土しており、補強材として用いられたと考えられる。竈2は、東壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部や袖部が残存していないため、火床面から煙道部までが124cmで、燃焼部幅が30cmしか確認できなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用し、部分的に6cmほど掘り込んで第3層を埋土している。火床面は、第3層上面で火熱を受けて赤変硬化している。煙道部寄りの位置から、支脚と見られる粘土塊と礫が横位で出土しており、火床部から煙道部にかけて底面が赤変した箇所も確認されることから、竈並びの二掛竈と考えられる。煙道部は、壁外へ74cmほど掘り込まれ、外傾している。支脚が竈内から出土していることから、竈1から竈2に作り替えたものと考えられる。

#### 竈層解説（竈1）

1 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量
2 に赤褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・燒土粒子、炭化粒子少量	6 白色	焼土ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・燒土粒子少量	7 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
4 赤褐色	燒土粒子中量、粘土ブロック少量	8 赤褐色	焼土ブロック・ロームブロック少量、炭化粒子微量
		9 褐色	粘土粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量

#### 竈層解説（竈2）

1 黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量	4 褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量
2 に赤褐色	燒土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量	5 黑褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量
3 に赤褐色	燒土ブロック少量、ローム粒子微量		

ピット 5か所。P 1～P 5は深さ27～42cmで、性格は不明である。

#### ピット層解説（各ピット共通）

1 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	7 黑褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黑褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
4 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 明褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量		

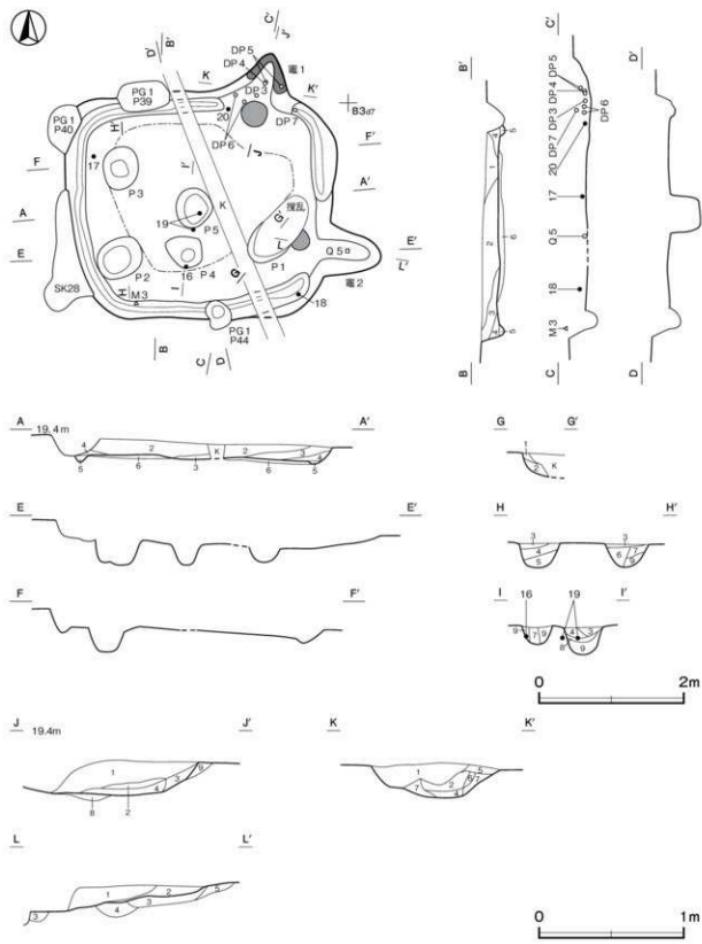
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。第5層は、壁溝の堆積土で、第6層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

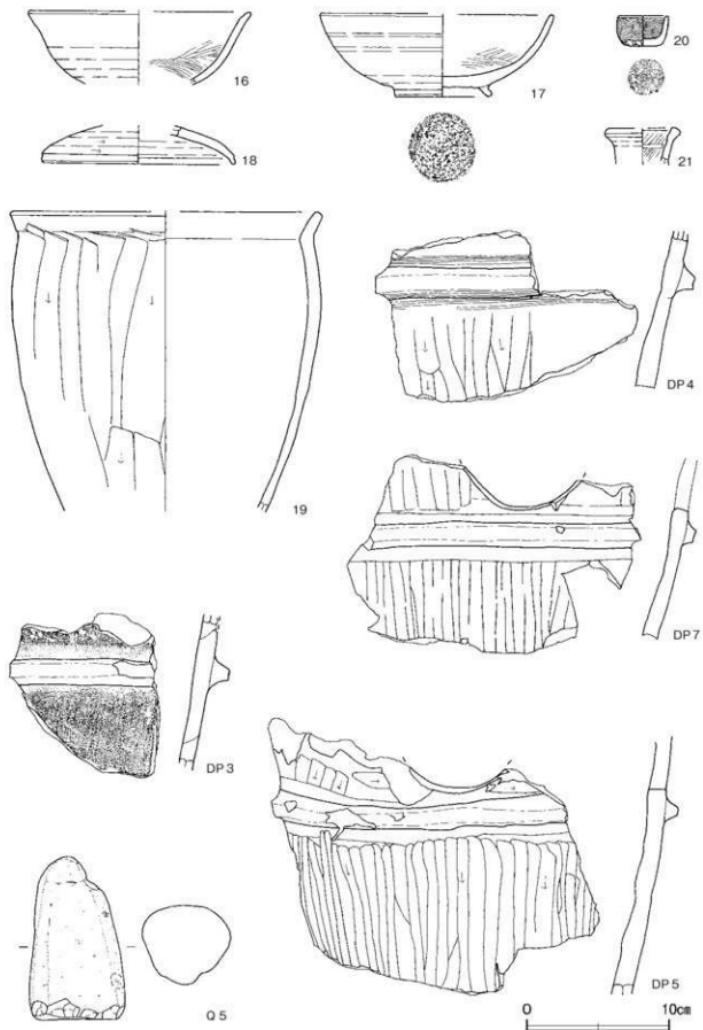
1 灰褐色	ロームブロック中量、砂鉄少量	5 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量		
4 暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片60点（坏14、高台付坏3、甕41、ミニチュア土器2）、須恵器片2点（甕1、蓋1）、土製品1点（支脚）、石器3点（砥石2、支脚1）、円筒埴輪16点、鉄滓1点（4.4g）、焼成を受けた雲母片岩2点（236.22g）のほか、繩文土器片29点（深鉢）、礫2点が出土している。細片が多く、全体に散在して出土していることから、埋め戻しの際に混入したものと考えられる。DP 3～DP 7は、竈1の覆土中や周辺の覆土下層から出土しており、竈1の補強材として用いられたとみられる。Q 5は、竈2の煙道部寄りの底面から、横位の状態で出土している。17は北西コーナー部壁際、18は南東コーナー部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。16はP 4、19はP 5の覆土上層からそれぞれ出土している。M 3は覆土上層から出土している。

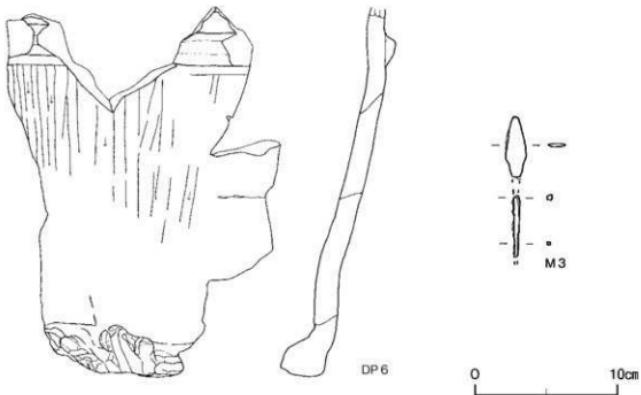
所見 竈が2か所確認されている。竈1は、円筒埴輪を補強材として用いている。竈2は、支脚の出土状況から竈並びの二掛竈と考えられる。時期は、出土土器から9世紀後葉～10世紀前葉と考えられる。



第24図 第4号竪穴建物跡実測図



第25図 第4号堅穴建物跡出土遺物実測図（1）



第26図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表（第25・26図）

番号	器種	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	手法	のれ	特徴	出土位置	備考
16	土器	环	(15.2)	(5.1)	—	長石・石英・雲母	にふい粉	普通	手縫外ヘラ削き 内面黒色処理 ヘラ削き	P4 穂土上層 20% PL.7		
17	土器	高台付円	(16.1)	5.8	[6.4]	長石・石英	にふい粉	普通	内面黒色処理 ヘラ削き 外・内面ともに摩滅	穂土下層 70% PL.8 次第減		
18	土器	壺	(13.2)	(2.6)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	大舟形回転ヘラ削り	穂土下層 10% PL.8 新泊塗		
19	土器	壺	(21.3)	(20.9)	—	長石・石英	棕	普通	体部外面縦位のヘラ削り 内面ナデ	P5 穂土上層 20% PL.9		
20	土器	土器	34	2.1	15	長石・石英	黒褐	良好 棱型	外・内面黒色処理 雪なべヘラ削き	穂土下層 100% PL.9		
21	土器	土器	(2.5)	(2.5)	—	長石・石英	褐灰	普通	長頭突起 雪なべ・内面黒色処理 体部外面縦位のヘラ削き 縦模様	穂土下層 10%		

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	円錐埴輪	(11.4)	(10.5)	1.2	(218.2)	長石・石英	棕	外面縦位のナデ 凸凹模ナデ 内面輪横刷 線位	穂1 穂土下層	PL10
DP 4	円錐埴輪	(12.0)	(18.2)	1.3	(412.3)	長石・石英	棕	外面縦位のナデ 凸凹模ナデ 内面縦位のナデ	穂1 穂土下層	PL10
DP 5	円錐埴輪	(18.1)	(23.0)	1.4	(807.4)	長石・石英・赤鉄鉱	明赤褐	透孔あり 外面縦位のナデ 内面輪横刷 表頭に よるナデ付 線位のナデ	穂1 穂土下層	PL10
DP 6	円錐埴輪	(25.7)	(19.0)	1.2	(15.8)	長石・石英・赤鉄鉱	棕	外面縦位のナデ 内面輪横刷 指頭によるナデ付 線位のナデ	穂1 穂土下層	PL10
DP 7	円錐埴輪	(13.6)	(20.4)	1.0	(421.2)	長石・石英・赤鉄鉱	棕	透孔あり 外面縦位のナデ 内面輪横刷 指頭に よるナデ付 線位のナデ	穂1 穂土下層	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色調	特徴	出土位置	備考
Q5	支脚	11.2	6.8	6.2	669.5	安山岩	褐色の白磁離を加工 近面平面に調整 斜面下端打ち欠き	穂1 穂土下層	PL11	
番号	器種	長さ	最大幅	最大厚	重量	材質		特徴	出土位置	備考
M3	旗	(8.5)	1.4	0.4	(5.6)	鐵	2点 同一倒体 旗身部分丸造 下端欠損 基部断面長方形	穂土上層	PL11	

第5号竪穴建物跡（第27・28図 PL.4）

位置 調査区東南部のB 3 d7 区、標高 19 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第74号土坑を掘り込み、第12号土坑、第1号溝、第1号ピット群P 41～P 43に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸方向は 3.01m で、東西軸方向は前平を受けているため 3.82m しか確認できなかった。東

西軸方向はN-80°-Eで、東西方向に長い長方形と考えられる。壁は、高さ6~23cmで、外傾している。

**床** 平坦で、中央部西寄りが踏み固められている。確認できた壁下には、壁溝が巡っている。

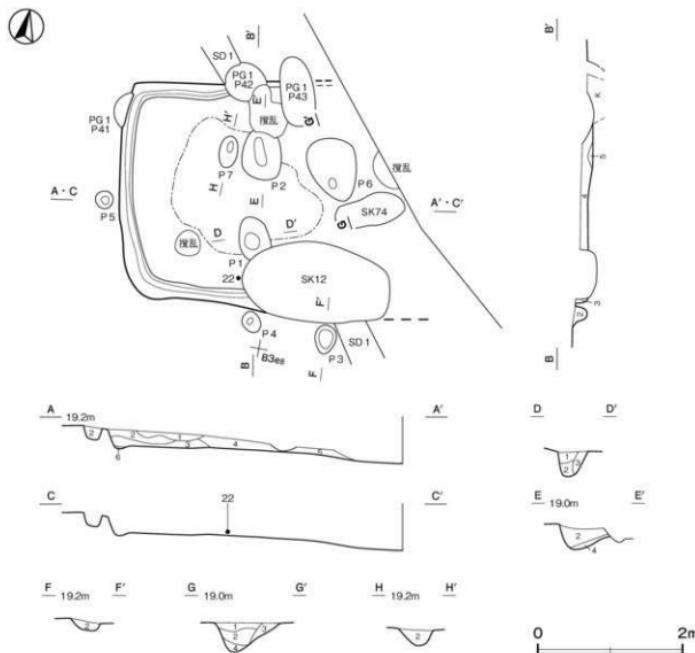
**電** 東部が搅乱を受けているため確認できなかったが、搅乱部分の覆土中に粘土粒子や焼土粒子がみられるこ<sup>ト</sup>から、東壁に付設されていた可能性がある。

**ピット** 7か所。P1・P2は深さ34cm・30cmで、配置や規模から主柱穴と考えられる。P3~P5は深さ10~16cmで、覆土が近似していることから、壁外柱穴と考えられる。P6・P7は深さ39cm・22cmで、性格は不明である。

**土層解説 (各ピット共通)**

1 黒 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 3 緑 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  
2 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量 4 褐 色 ロームブロック中量

**覆土** 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況や、ロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。第6層は、壁溝の堆積土である。



第27図 第5号竪穴建物跡実測図

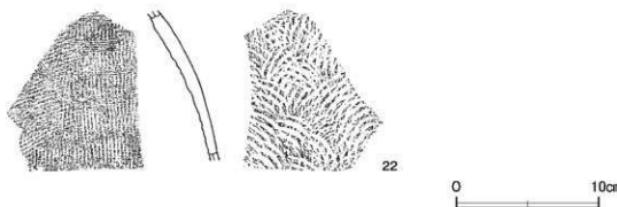
**土層解説**

1 極暗褐色	ロームブロック多量。焼土粒子・炭化粒子少量。	4 暗褐色	ロームブロック少量。炭化粒子微量。
2 黄褐色	ロームブロック多量。炭化粒子少量。焼土粒子微量。	5 暗褐色	ロームブロック中量。炭化粒子少量。
3 黑褐色	ロームブロック多量。炭化粒子少量。	6 暗褐色	ローム粒子少量。

**遺物出土状況** 土師器片 15 点（坏 1、高台付坏 4、甕 10）、須恵器片 2 点（甕）、鐵滓 1 点（23 g）のほか、

繩文土器片 8 点（深鉢）が出土している。22 は、南壁際の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、内面を黒色処理された高台付坏が出土しており、9世紀後葉と考えられる。



第28図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	か	出土位置	備考
22	須恵器	甕	-	(107)	-	長石・石英	灰	良好	体部外表面の平行叩き接合部 内面同心円 法の当て具痕	か	覆土下層	5% PL. 9

**第7号竪穴建物跡（第29図 PL. 4）**

**位置** 調査区中央部のB 2J9 区、標高 18.5 m の台地斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号溝、第4号ピット群 P 7 に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.45 m、短軸 2.74 m の長方形で、長軸方向は N - 72° - W である。壁は高さ 8 ~ 30 cm で、外傾している。

**床** 平坦で、炉の周囲が踏み固められている。壁下には、壁溝がほぼ全周している。

**炉** 東壁寄りに付設されている。径 50 ~ 54 cm の円形で、床面から 11 cm ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。ローム粒子を多量に含んだ第1・2層を埋土し、第1層上面が炉床面である。炉床面は、火熱を受けて赤変硬化している。

**炉土層解説**

1 赤褐色	焼土ブロック多量。ローム粒子・炭化粒子少量。	2 暗褐色	ローム粒子多量。焼土粒子少量。炭化粒子微量。
-------	------------------------	-------	------------------------

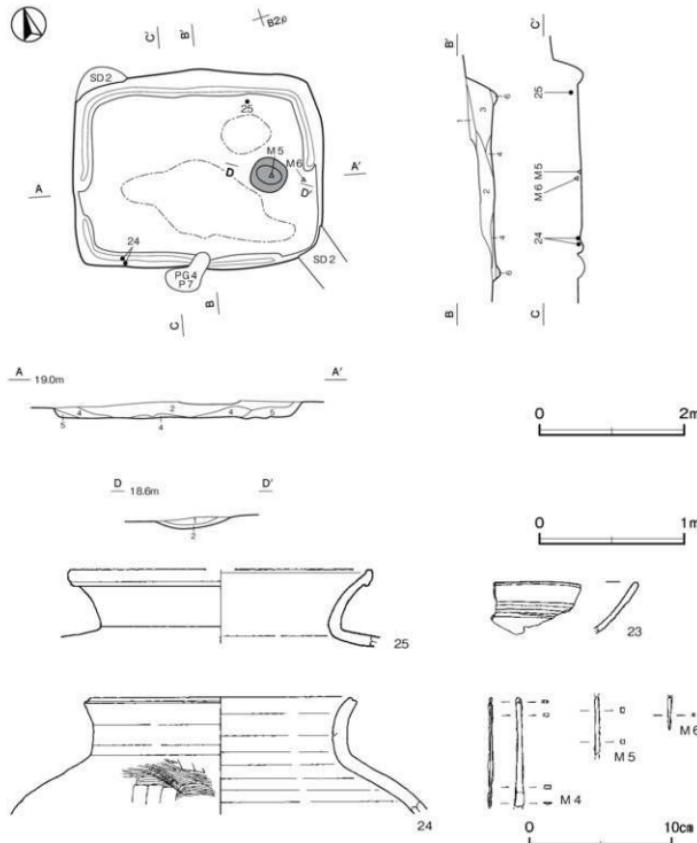
**覆土** 5 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており、ロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。第6層は、壁溝の堆積土である。

**土層解説**

1 暗褐色	ローム粒子少量。炭化粒子微量。	4 暗褐色	ロームブロック中量。焼土粒子微量。
2 暗褐色	ロームブロック少量。炭化粒子微量。	5 明褐色	ローム粒子多量。
3 極暗褐色	ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子微量。	6 暗褐色	ローム粒子中量。炭化粒子微量。

**遺物出土状況** 土師器片 25 点（坏 2, 瓢 23）、須恵器片 1 点（甕）、鉄製品 3 点（不明）、鐵滓 1 点（18 g）のほか、繩文土器片 29 点（深鉢）、陶器片 1 点（碗）が出土している。遺物は全体に散在しており、埋め戻しの過程で投棄されたものとみられる。M 5 は炉床面から、M 6 は床面からそれぞれ出土している。24 は南壁際の床面から、25 は北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。23, M 4 は、覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 炉が付設されているため、他の堅穴建物と性格が異なる可能性がある。時期は、土師器の坏の形状から 9 世紀後葉と考えられる。



第29図 第7号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	断 壁	土 色	調 地域	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
23	土器器	环	—	(36)	—	長石・石英・雲母・赤鉄鉱粒子	褐	普通	体部外側に三本の沈線	覆土中	5%
24	土器器	甕	[18.0]	(8.1)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外側・内面横帯ナダ、頭部ヘラ磨き後縫合のヘラナダ	床面	5%
25	知能器	甕	[21.0]	(5.3)	—	長石・石英・黒色粒	灰青褐	良好	口縁部外・内面横帯のヘラナダ	覆土下層	5% PL. 9

番号	器 种	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 4	木頭構造品	(7.6)	0.7	0.2	(2.8)	鐵	棒状 上端に孔 下端欠損 断面長方形 下半は幅広	覆土中	PL.11
M 5	木頭構造品	(4.1)	0.4	0.3	(1.1)	鐵	棒状 両端欠損 断面四角形	床面	PL.11
M 6	木頭構造品	(2.4)	0.2	0.2	(0.4)	鐵	棒状 上端欠損 断面四角形	床面	PL.11

## 第9号竪穴建物跡（第30～32図 PL.4・5）

位置 調査区西部のB 2/4区、標高195mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13号竪穴建物跡を掘り込み、第45・46号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.84m、短軸3.91mの長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ6～26cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北西部の貯蔵穴の周辺を除く壁下には、壁溝が巡っている。

電 北壁の中央部に付設されている。大半が第45号土坑に掘り込まれているため、火床面から煙道部までは138cmしか確認できなかった。袖部は残存しておらず、燃焼部幅は15cmしか確認できなかった。火床面は、床部から15cmほど掘り込み、第10～13層を床面から3cmほど高く埋土して構築されている。火床面は第10層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床部の奥壁に段を有し、煙道部は壁外へ67cm掘り込まれ、外傾している。

## 竪土層解説

1	赤 土	赤土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量、灰化粒子微量	8	暗赤褐色	燒土アロック中量、灰化粒子・ローム粒子少量
2	暗赤褐色	燒土アロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、灰化粒子微量	9	暗赤褐色	燒土粒子中量、粘土アロック・ローム粒子少量、灰化粒子微量
3	にぶい赤褐色	燒土アロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、灰化粒子・粘土粒子微量	10	暗赤褐色	燒土アロック多量、ロームアロック中量、灰少量、灰化粒子微量
4	赤 灰	燒土アロック多量、ローム粒子少量、灰化粒子微量	11	明赤褐色	燒土アロック極めて多量、ローム粒子少量、灰化粒子微量
5	暗赤褐色	燒土アロック・粘土アロック・ローム粒子少量	12	暗褐色	ロームアロック中量、燒土アロック少量
6	にぶい赤褐色	ロームアロック・燒土アロック多量、粘土アロック少量	13	暗赤褐色	ローム粒子・燒土粒子少量
7	赤 灰	燒土アロック多量、ロームアロック・粘土アロック少量、灰化粒子微量			

ピット P 1 は深さ20cmで、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

## ピット土層解説

1	暗褐色	ロームアロック多量、灰化粒子少量	2	褐色	ローム粒子多量
---	-----	------------------	---	----	---------

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長軸136cm、短軸96cmの隅丸長方形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は、5層に分層でき、ロームアロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

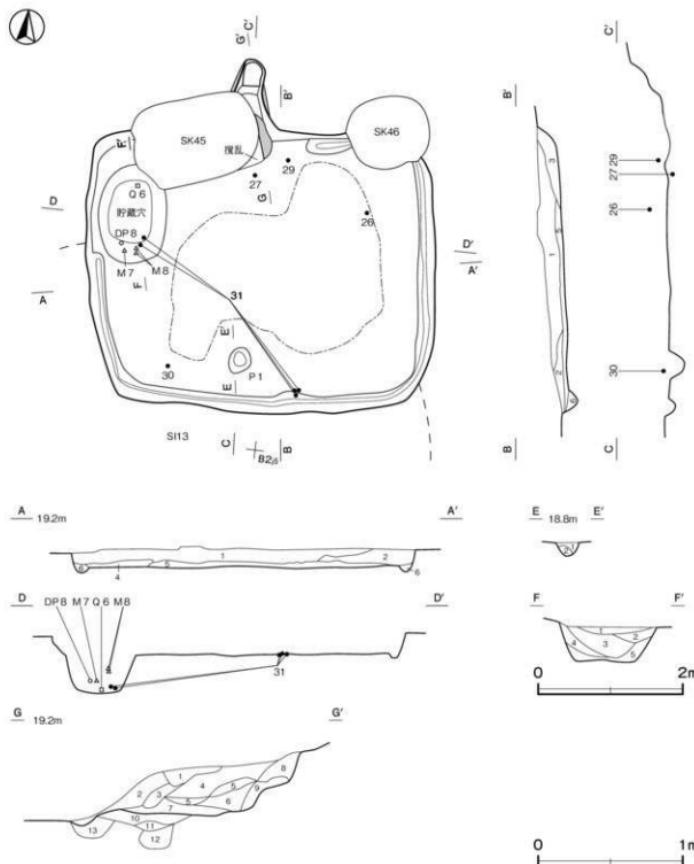
## 貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ロームアロック中量、灰化粒子微量	4	暗褐色	ロームアロック多量、灰化粒子微量
2	暗褐色	ロームアロック少量、灰化粒子微量	5	褐色	灰化粒子少量
3	褐色	ロームアロック少量、灰化粒子微量			

**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。第6層は、壁溝の堆積土である。

**土層解説**

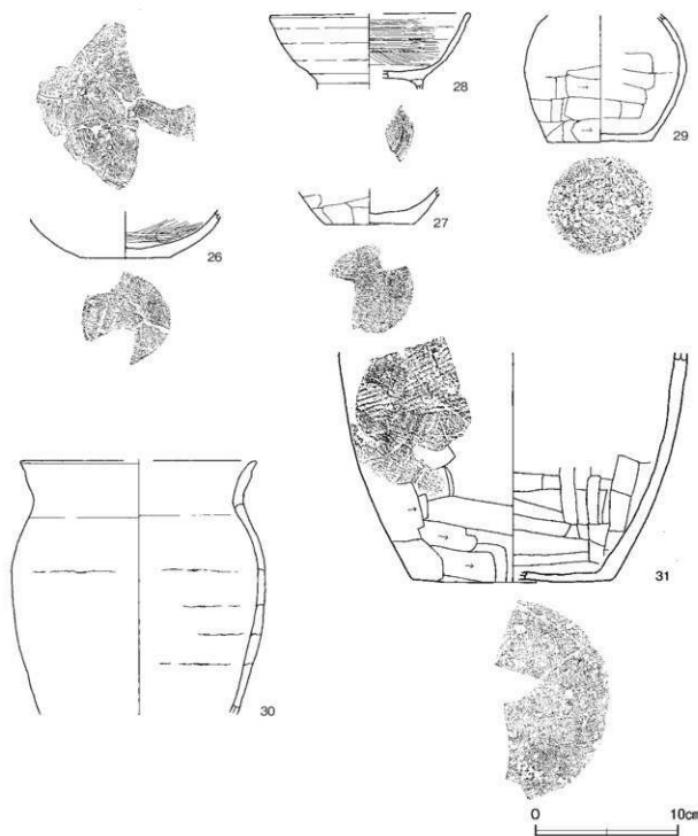
1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	4 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量	5 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 塗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量



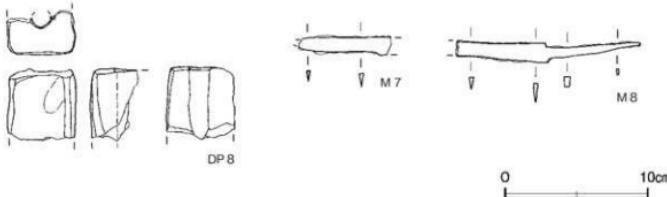
第30図 第9号竖穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 44 点（壺 8、甕 35、小形甕 1）、須恵器片 8 点（甕）、石器 1 点（砥石）、鐵製品 2 点（刀子）、鋳型 1 点、鐵滓 1 点 (48.4 g)、焼成を受けた雲母片岩 1 点 (2976.8 g) のほか、縄文土器片 15 点（深鉢）、剥片 2 点が出土している。27 は、竈の掘方の埋土中から出土している。Q 6 は、貯蔵穴の底面から出土している。DP 8、M 7・M 8 は、貯蔵穴の覆土下層からそれぞれ出土している。31 は、床面と貯蔵穴の覆土下層から出土した破片が接合したものである。30 は、床面から出土している。29 は竈の覆土下層から、26 は覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10 世紀前葉と考えられる。



第31図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第32図 第9号堅穴建物跡出土遺物実測図（2）

第9号堅穴建物跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
26	土師器	环	-	(3.3)	6.1	長石・石英・漂母	普通 多方向のペラ削り 内面に筋溝「木」	内面黒色処理 ヘラ削き 底部削輪へラ削り後 覆土下解 20% PL.7	覆土上解	20% PL.7
27	土師器	环	-	(2.6)	6.0	長石・石英・漂母	にふい赤褐	普通 内面黒色処理 削輪へラ削り 脱部一方のへ	覆土下解	10% PL.8
28	土師器	高台付環	[13.8]	(5.3)	-	長石・石英	普通 内面黒色処理 底部外縁下端横枝のヘラ削り	内面黒色処理 ヘラ削き 底部削輪へラ削り 底部外縁下端横枝のヘラ削り	覆土下解	30% PL.8 二次焼成
29	土師器	小形器	-	(8.8)	7.2	長石・石英	にふい赤褐	普通 底部外縁下端横枝のヘラ削り	底部外縁下端横枝のヘラ削り	覆土下解 30% PL.8 二次焼成
30	土師器	甕	[16.2]	(17.5)	-	長石・石英	普通 口縁部外縁下端横枝のヘラ削り	口縁部外縁下端横枝のヘラ削り 内面へラナダ 底部外縁横枝 外面綻	底面 底面へラナダ 内面へラナダ 底部外縫斜位の平行叩き 下端横枝のヘラ削り	床面 20% PL.9 底面へラナダ 底部外縫斜位の平行叩き 下端横枝のヘラ削り 底面へラナダ 底部外縫斜位の平行叩き 下端横枝のヘラ削り
31	陶器	甕	-	(15.9)	(14.0)	長石・石英・漂母	明治期 不透明	陶器外縫斜位の平行叩き 底部外縫斜位へラナダ後横枝のヘラ削り	床面 20% PL.9 底面へラナダ 底部外縫斜位へラナダ後横枝のヘラ削り 底面へラナダ 底部外縫斜位へラナダ後横枝のヘラ削り	床面へラナダ 底面へラナダ 底部外縫斜位へラナダ後横枝のヘラ削り 底面へラナダ 底部外縫斜位へラナダ後横枝のヘラ削り

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 8	盤型	(5.0)	(3.2)	(4.7)	(82.9)	長石・石英 赤色粒子・粗粒	にふい赤褐	中央部に孔あり 孔径1.4cm 内面使用により黒色 に変色 稲穀製品の型崩	堅穴六面 覆土下解	PL.12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	不明	16.8	17.1	14.1	2976.8	雲母片岩	上・下面平坦に加工 1面側面直に加工 被熱により赤変	堅穴六面 覆土底面	觀察表のみ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	刀子	(6.4)	1.2	0.2	(4.27)	鉄	刃部断面三角形 両端欠損 M 8と同一個体	堅穴六面 覆土下解	PL.11
M 8	刀子	(12.8)	1.4	0.3	(11.50)	鉄	刃部断面三角形 基部断面長方形 M 7と同一個体	堅穴六面 覆土下解	PL.11 2点接合

第10号堅穴建物跡（第33図）

位置 調査区東南部のB 30区、標高195mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.60m、短軸2.30mの不整長方形で、主軸方向はN-83°-Eである。壁は高さ20~30cmで、外傾している。

床 平坦で、硬化した部分は認められない。

竈 東壁の一部が外側に張り出し、粘土粒子が散在して確認された。床面に土坑状の掘り込みが確認され、覆土中に粘土粒子や焼土粒子がみられることから、東壁に付設されていた可能性がある。

#### 竈土層解説

- |       |                                |     |                              |
|-------|--------------------------------|-----|------------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・燒土粒子・炭化<br>粒子微量 | 3 間 | ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子<br>微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土粒子少量、燒土ブロック・炭化物・ローム<br>粒子微量  |     |                              |

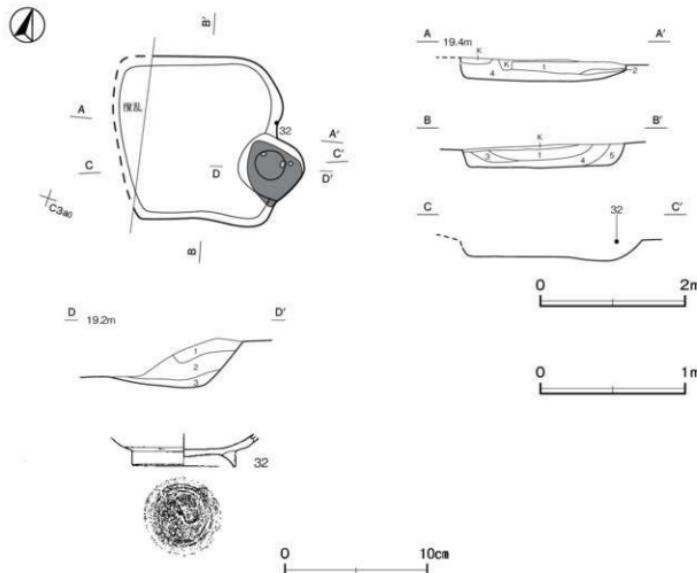
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 黑褐色 ロームブロック少量、炭化物微量	4 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量	5 褐色 ローム粘子中量
3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量	

**遺物出土状況** 土師器片8点(高台付坏3, 壺5), 焼成粘土塊2点(7.2g)のほか、縄文土器片6点(深鉢), 砧1点が出土している。32は東壁際の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。



第33図 第10号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
32	土師器	壺	—	(23)	7.1	長石・石英・雲母	にぶい相	普通 摩滅著しい	内面黑色処理 ヘラ削き 底部回転ヘラ削り	覆土上層	20%	

第12号竪穴建物跡（第34～38図 PL 5・6）

**位置** 調査区西南部のC2b9区、標高18.5mほどの台地斜面部に位置している。

**重複関係** 第72・73号土坑、第2・3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 南西部が斜面部のため削平されているが、長軸 4.88m、短軸 4.81m の方形で、主軸方向は N - 21° - W である。壁は高さ 8 ~ 46cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部東寄りの一部が踏み固められている。確認できた壁下には、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで 154cm で、燃焼部幅は 50cm である。右袖部がわずかに残存している。火床部は、床面から 12cm ほど掘りくぼめ、第 8・9 層を埋土して構築されている。火床面は、火熱を受けて赤変硬化しており、土製の支脚 (DP16) が据えられた状況で出土している。煙道部は、壁外へ 94cm ほど掘り込まれ、外傾している。

#### 竈土層解説

1	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5	暗	褐色	ロームブロック少量・焼土粒子微量
2	暗	褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	6	暗	褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量・炭化粒子・粘土粒子微量
3	暗	褐色	焼土ブロック少量・ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	7	暗	褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4	暗	褐色	焼土ブロック少量・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量	8	赤	褐色	焼土粒子中量・ローム粒子・炭化粒子微量

**ピット** 3か所。P 1 は、南壁際に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 2・P 3 は、南壁際と中央部で確認されたピットで、性格は不明である。

#### P 1 土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック・炭化物微量	3	暗	褐色	ロームブロック少量
2	暗	褐色	ローム粒子少量				

**貯蔵穴** 西部に位置している。長径 150cm、短径 117cm の楕円形で、深さは 45cm である。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は 5 層に分層でき、各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 貯蔵穴土層解説

1	暗	褐色	ロームブロック少量・焼土ブロック・炭化粒子微量	4	暗	褐色	ロームブロック・炭化物微量
2	黒	褐色	ロームブロック中量	5	暗	褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐	褐色	ローム粒子少量				

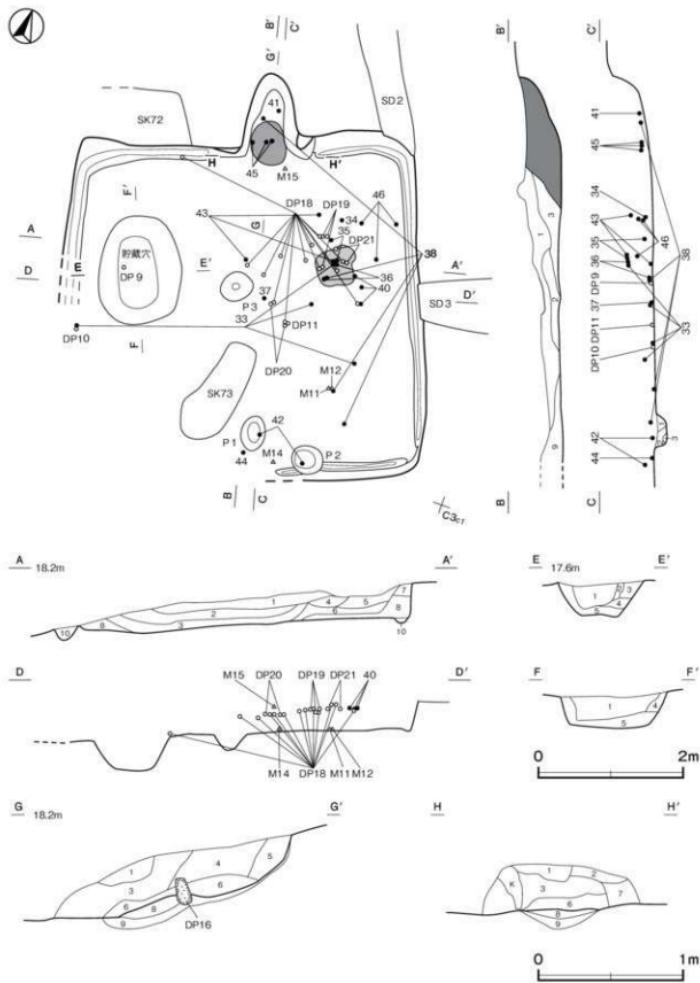
**覆土** 9 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第 4 層は焼土塊で、第 4 ~ 6 層は東側から埋め戻された堆積状況を示している。第 10 層は、壁溝の堆積土である。

#### 土層解説

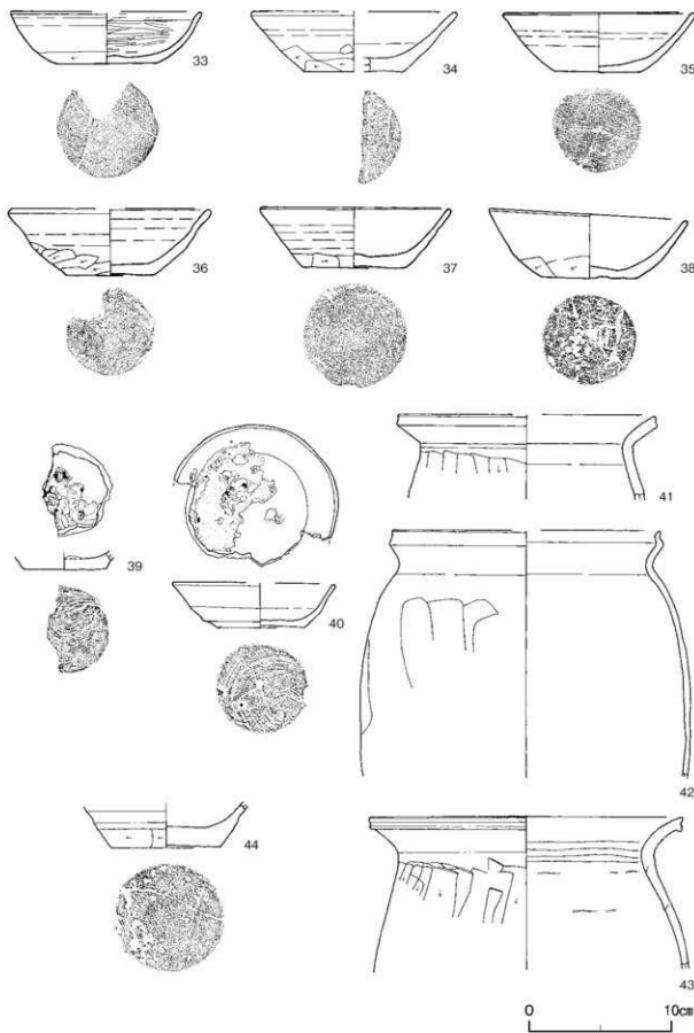
1	黒	褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	6	暗	褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
2	黒	褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗	褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量
3	暗	褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗	褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
4	赤	褐色	焼土ブロック少量・ローム粒子・炭化粒子微量	9	暗	褐色	ロームブロック少量・炭化物微量
5	暗	褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	10	暗	褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片 172 点 (环 13, 直 1, 壺 158), 須恵器片 24 点 (环), 土製品 9 点 (土玉 7, 支脚 1, 窓口 1), 石器 2 点 (砾石), 鉄製品 1 点 (釘), 燃成粘土塊 2 点 (147.6g), 炉壁 27 点 (4884.5g), 鉄滓 13 点 (307.6g) 燃成を受けた雲母片岩 9 点 (3253.0g) のほか、織文土器片 73 点 (深鉢), 陶器片 1 点 (碗), 金属製品 1 点 (煙管), 自然礫 3 点が出土している。38 は窓内や南部の床面, 33・34・37・42 は覆土下層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。DP 9 ~ DP15 は、窓の火床部付近と床面に散在した状態で, M 10 は窓の掲方の覆土中, M 11・M 12・M 14 は床面からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。35・36・39・40, DP17 ~ DP21, M 9・M 13・M 15 は、第 4 層の焼土塊周辺から出土している。これらの鉄製・銅鑄造関連遺物は、廃絶後の凹地に投棄されたものとみられ、周辺に生産に関わる施設が存在していた可能性がある。

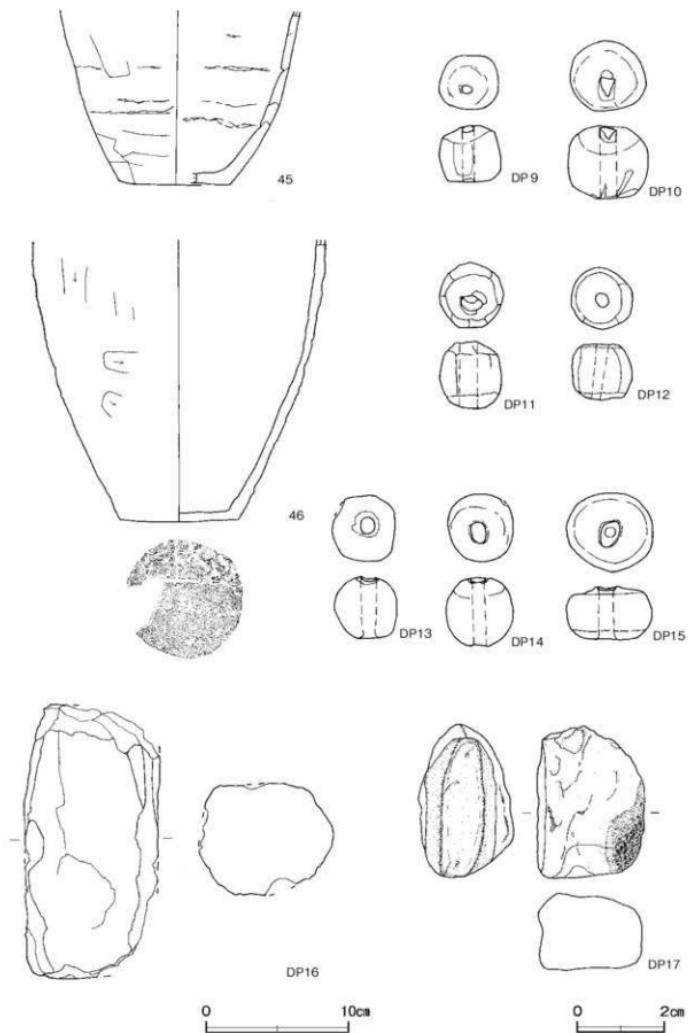
**所見** 建物廃絶後の凹地状の部分が、金属器の生産に伴う廃棄場として利用されている。時期は、出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。



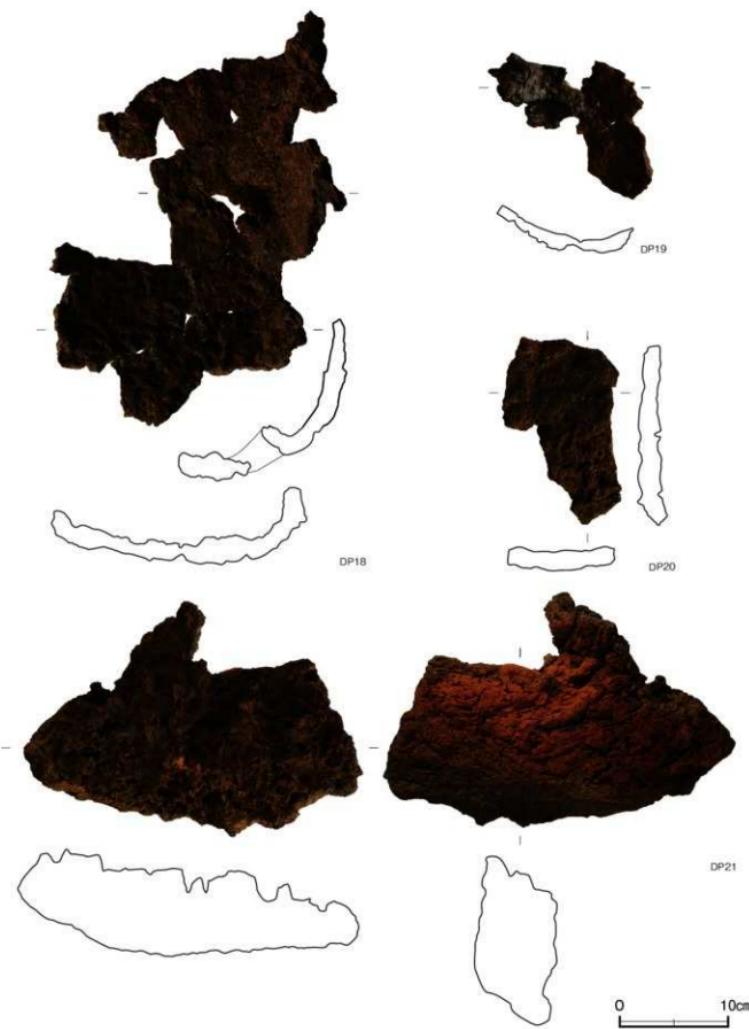
第34図 第12号竪穴建物跡実測図



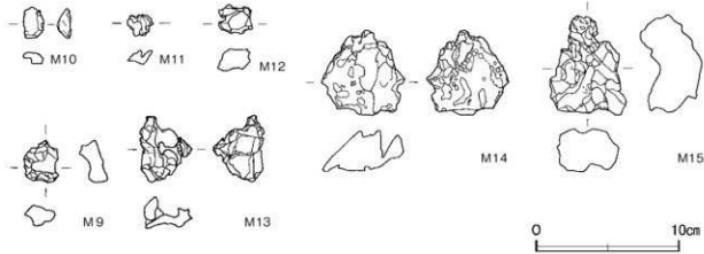
第35図 第12号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



第36図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）



第37図 第12号堅穴建物跡遺物実測図（3）



第38図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図(4)

第12号竪穴建物跡出土遺物観察表(第35~38図)

番号	種別	器種	口径	深高	底径	胎土	色調	火成	手法の特徴	出土位置	備考	
33	土壺器	环	[13.2]	36	69	長石・石英	に赤い粉 泥炭混入	火成	外底面下端手持ちへラ削り 内面へラ削き	覆土下層 床面	20% PL 7 二次焼成	
34	土壺器	环	[14.1]	42	[68]	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面下端手持ちへラ削り 瓶部二方向のへ ラ削り 内面へラ削	覆土下層 床面	PL 7 三次焼成	
35	土壺器	环	13.1	4.2	60	長石・石英	明褐色	普通	火成	外底面下端手持ちへラ削り 瓶部二方向のへ ラ削り 内面へラ削	覆土上層 床面	60% PL 7 三次焼成
36	土壺器	环	[13.8]	4.6	60	長石・石英	橙	普通	火成	外底面下端手持ちへラ削り 瓶部二方向のへ ラ削り 内面へラ削	覆土上層 床面	80% PL 7 三次焼成
37	土壺器	环	13.2	4.2	72	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面下端手持ちへラ削り 瓶部二方向のへ ラ削り 内面へラ削	床面	95% PL 8 三次焼成	
38	土壺器	环	13.7	4.8	65	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面下端手持ちへラ削り 瓶部二方向のへ ラ削り 内面へラ削	覆土下層 床面	60% PL 8 三次焼成	
39	土壺器	环	-	(1.0)	5.8	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面回転式切り 内面鉄錆状物質・縁膏付着	覆土上層 床面	60% PL 8 三次焼成	
40	土壺器	环	[11.1]	3.2	61	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面回転式切り 内面鉄錆状物質・縁膏付着	覆土上層 床面	10% PL 12 三次焼成	
41	土壺器	變	[17.8]	(5.8)	-	長石・石英	橙	普通	火成	外底面外側へラ削り 体部外面縦線のへラ 削り 内面へラ削	覆土下層 床面	5%
42	土壺器	變	(18.4)	(17.3)	-	長石・石英・雲母	に赤い粉 普通	火成	外底面外側へラ削り 体部外面縦線のへラ削 り 内面へラ削	覆土下層 床面	PL 9	
43	土壺器	變	-	(21.1)	(10.7)	長石・石英	橙	普通	火成	外底面外側へラ削り 体部外面縦線のへラ削 り 内面へラ削	覆土上層 床面	PL 8
44	土壺器	變	-	(3.2)	7.5	長石・石英	に赤い粉 普通	火成	外底面外側へラ削り 底部多方向のへ ラ削り 内面へラ削	床面	5%	
45	土壺器	變	-	(12.1)	7.7	長石・石英	橙	普通	火成	外底面外側へラ削り 底部多方向のへラ 削り 内面へラ削	覆土下層 床面	10% PL 9
46	土壺器	變	-	(19.5)	8.3	長石・石英	橙	普通	火成	外底面外側へラ削り 底部多方向のへラ 削り 内面へラ削	覆土上層 床面	30% PL 8 二次焼成
番号	器種	最大径	径厚	重量	重業	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
DP19	土玉	1.4	0.3	1.3	29	長石・石英	に赤い赤褐色	ナデ 一方向からの摩孔		床面	PL 10	
DP10	土玉	1.8	0.4	1.7	45	長石・石英・赤色粘土	に赤い赤褐色	ナデ 二方向からの摩孔		床面	PL 10	
DP11	土玉	1.5	0.4	1.5	27	長石・石英	に赤い粉	ナデ 一方向からの摩孔		床面	PL 10	
DP12	土玉	1.4	0.3	1.3	24	長石・石英	橙	ナデ 一方向からの摩孔		覆土中	PL 10	
DP13	土玉	1.5	0.4	1.3	27	長石・石英・赤色粘土	橙	ナデ 一方向からの摩孔		覆土中	PL 10	
DP14	土玉	1.6	0.4	1.6	33	長石・石英	に赤い赤褐色	ナデ 一方向からの摩孔		覆土中	PL 10	
DP15	土玉	2.0	0.5	1.2	4.4	長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	ナデ 一方向からの摩孔		覆土中	PL 10	
番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
DP16	支脚	19.0	9.3	7.0	(764)	長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	火熱により表面変形不明		籠火床部	PL 10	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重業	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
DP17	羽口	(3.5)	(2.5)	(2.2)	(14.2)	長石・石英・砂	に赤い粉	外底面状状痕 内面火熱により変化		覆土上層 床面	PL 12	
DP18	卵壁	(13.2)	(14.5)	0.6~ 1.4	[113.8]	長石・石英・砂	灰黃褐色	内面黒色化するに伴なって火熱化 発泡	外底面に火熱化により変色 内面へラ削	覆土上層 床面	PL 12	
DP19	卵壁	(17.2)	(16.9)	1.2~ 1.3	[25.0]	長石・石英・砂	灰黃褐色	外底面火熱化により火熱化するに伴なって火熱化 発泡	外底面に火熱化により変色 内面へラ削	覆土上層 床面	PL 12	
DP20	卵壁	(38.0)	(26.4)	0.6~ 2.3	[128.0]	長石・石英・砂	灰黃褐色	外底面火熱化により火熱化するに伴なって火熱化 発泡	外底面に火熱化により変色 内面へラ削	覆土上層 床面	PL 12	
DP21	卵壁	(21.4)	(31.2)	3.8~ 7.2	[262.0]	長石・石英・砂	灰黃褐色	外底面火熱化により火熱化するに伴なって火熱化 発泡	外底面に火熱化により変色 内面へラ削	覆土上層 床面	PL 12	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 9	鉄滓	(3.0)	(2.4)	1.6	15.5	鉄	全体発泡 酸化土紗付着 着磁性あり 流動澤	覆土上層	
M 10	鉄滓	(2.2)	(1.4)	0.8	27	鉄	赤土状 表面滑潤 二面削断面 内部空洞あり 着磁性なし	鐵漬方覆土中	
M 11	鉄滓	(1.5)	(1.8)	1.0	20	鉄	全面鉄化 酸化土紗付着 着磁性あり 合鉄鉄滓	床面	PL12
M 12	鉄滓	(2.1)	(2.5)	1.6	7.3	鉄	全面鉄化 土紗付着 着磁性あり 合鉄鉄滓	床面	PL12
M 13	鉄滓	(4.6)	(3.6)	2.2	29.2	鉄	流動による崩壊 殻治 着磁性あり 伊内澤	覆土上層	PL12
M 14	鉄滓	(5.9)	(5.7)	3.0	90.9	鉄	流動による崩壊 殻治 着磁性なし 伊内澤	床面	PL12
M 15	鉄滓	(6.8)	(5.2)	4.2	116.9	鉄	全面鉄化 酸化土紗付着 着磁性あり 合鉄鉄滓	覆土上層	

表4 平安時代堅穴建物跡一覧表

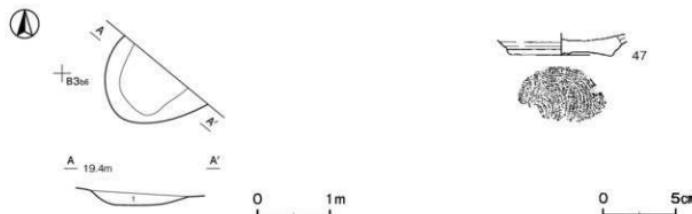
番号	位置	平面形 （東・法面）	面積 （長軸×短軸）(m) (cm)	標高	床面	壁構 （柱穴・基盤）	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考
							柱穴	基盤	ビット 穴・量				
1	B 3g3	N - 6° - W 方 形	3.64 × 3.42	16 ~ 32	平坦	一部	2	1	-	人為	土器類、瓦器類、土器 品、石器類	10世紀前半	
2	B 3e5	N - 88° - W 方 形	3.50 × 3.38	8 ~ 17	平坦	一部	-	1	2	人為	土器類、瓦器類、食器類 等、陶片類	10世紀後半 → SKH-14- 5 PG-1 PG-76	
4	B 3d6	N - 92° - E （南北形）	1.77 × 3.13	14 ~ 24	平坦	全周	-	-	5	人為	土器類、瓦器類、食器類 等、陶片類	9世紀後半 → PG-1 PG-2 PG-3 PG-4 PG-5 PG-6 PG-7 PG-8 PG-9 PG-10 PG-11 PG-12 → SKH-14-5 PG-76	
5	B 3d7	N - 80° - E （東方形）	3.82 × 3.03	6 ~ 24	平坦	一部	2	-	5	人為	土器類、瓦器類、食器 類、陶片類	9世紀後半 → SKH-14-5 PG-1 PG-76 → PG-12 → SKH-14-5 PG-76	
7	B 2i9	N - 72° - W 長 方 形	3.65 × 2.74	8 ~ 30	平坦	ほぼ 全周	-	-	-	人為	土器類、瓦器類、食器 類、陶片類	9世紀後半 → SKH-14-5 PG-1 PG-76	
9	B 2i4	N - 9° - W 長 方 形	4.84 × 3.91	6 ~ 35	平坦	一部	-	1	-	人為	土器類、瓦器類、食器 類、陶片類	10世紀前半 → SKH-14-5 PG-1 PG-76	
10	B 3j0	N - 83° - E 不規 長 方 形	2.60 × 2.30	20 ~ 30	平坦	-	-	-	-	人為	土器類、瓦器類、食器 類、陶片類	10世紀前半 → SKH-14-5 PG-1 PG-76	
12	C 2a9	N - 21° - W 方 形	4.88 × 4.81	8 ~ 46	平坦	一部	-	1	2	北壁	1 人為 土器類、瓦器類、食器 類、陶片類	9世紀後半 → SKH-14-5 PG-1 PG-76	

## (2) 土坑

当時代と考えられる土坑6基を確認した。以下、時期が推定できる遺物が出土した1基については、本文と実測図で解説する。その他の形状や覆土の状況が類似している5基については、実測図（第40図）土層解説、一覧表で掲載する。

### 第25号土坑（第39図）

位置 調査区北部東側のB 3b5区、標高19 mの台地平坦面に位置している。



第39図 第25号土坑・出土遺物実測図

**規模と形状** 南北径は142cmで、北東部が調査区域外に延びているため、東西径は89cmしか確認できなかった。

円形もしくは梢円形と考えられ、深さは16cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

**覆土** 粒径の大きいロームブロックが含まれており、埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 47も含めた土器片6点(坏)が、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。

第25号土坑出土遺物観察表(第39図)

番号	種別	基盤	口径	深さ	断土	色	調査	発現	手法	特徴ほか	出土位置	備考
47	土器器	坏	-	(15)	[7.0]	灰白・石英・赤色粒子	にふい音有	普通	坑頭回転糸切り		覆土中	10%

#### 第23号土坑土層解説

- 1 埋褐色 ロームブロック少量

#### 第49号土坑土層解説

- 1 埋褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

#### 第68号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 2 埋褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 3 埋褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 4 埋褐色 ローム粒子中量

#### 第71号土坑土層解説

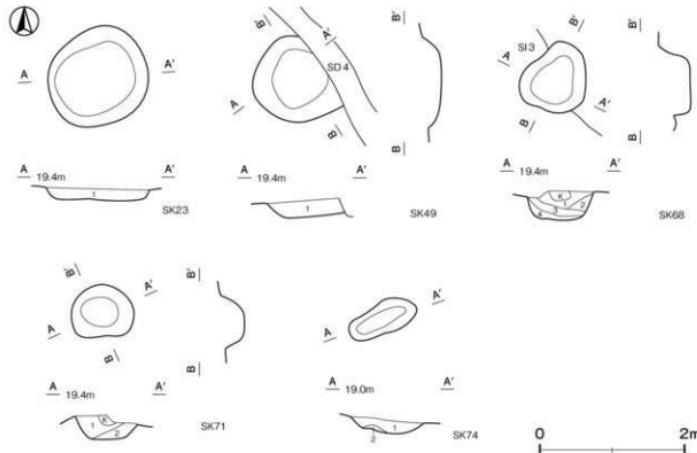
- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

- 2 埋褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

#### 第74号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

- 2 埋褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量



第40図 平安時代土坑実測図

表5 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
23	B 3b5	-	円形	1.38 × 1.36	13	傾斜	平坦	人為	土器器	
25	B 3b5	-	【円形】	1.42 × (0.89)	16	傾斜	平坦	人為	土器器	
49	B 2h7	-	【円形】	[1.32] × 1.29	24	傾斜	平坦	人為	須恵器	本跡→SD 4
68	B 3c6	-	椭円形	0.48 × 0.40	35	外傾	平坦	人為	縄文土器、土器器、鉢津	本跡→SI 3
71	B 3c6	N - 66° - E	椭円形	0.87 × 0.70	30	外傾	平坦	人為	縄文土器、土器器	
74	B 3d7	N - 65° - E	椭円形	0.99 × 0.46	16	傾斜	班状	人為		本跡→SI 5

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかではない竪穴建物跡1棟、道路跡1条、溝跡1条について、本文と実測図で掲載する。その他、時期が明らかではない土坑52基、溝跡6条、ピット群5か所については、実測図と一覧表にて掲載する。また、表土や遺構に伴わない遺物については、実測図と観察表を掲載する。

#### (1) 竪穴建物跡

##### 第2号竪穴建物跡（第41図）

**位置** 調査区中央部のB 3g4区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号ピット群P 9に掘り込まれている。

**規模と形状** 北西部が削平されているが、長軸4.05m、短軸3.34mの不整隅丸長方形で、長軸方向はN - 0° - Eである。壁は高さ3～5cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、硬化した部分は認められない。

**炉** ほぼ中央部に付設されている。長径70cm、短径52cmの楕円形で、床面から14cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第1～3層を埋土し、第1層上面が炉床面である。炉床面は、火熱を受けて赤変硬化している。

##### 炉土層解説

1 に赤褐色	燒土粒子中量	ローム粒子少量	炭化粒子微量	3 に黄褐色	ロームブロック中量	炭化物	燒土粒子微量
2 灰 色	ローム粒子少量	燒土粒子	炭化粒子微量				

**ピット** 5か所。P 1～P 5は深さ12～32cmで、性格は不明である。

##### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	3 黒褐色	炭化粒子少量	ロームブロック微量
2 灰褐色	ローム粒子中量	4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	

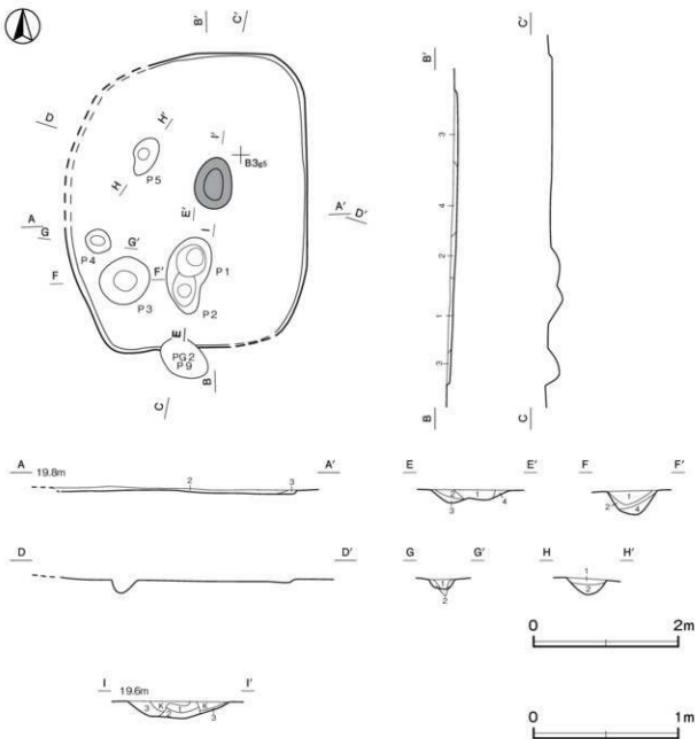
**覆土** 4層に分層できる。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

##### 土層解説

1 黒褐色	燒土粒子少量	ロームブロック・燒土粒子微量	3 灰褐色	ローム粒子少量	炭化粒子微量
2 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	燒土粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・燒土ブロック少量	炭化粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片21点(深鉢)、土器器片6点(壺1、壺5)、鉢津1点(5.1g)、焼成を受けた雲母片岩2点(1124.6g)が、全体に散在して出土している。遺物は、細片のために図示できない。

**所見** 出土遺物が細片のため、時期を明らかにできないが、周辺の遺構等から、平安時代の可能性があり、炉が付設されている第7号竪穴建物跡と同様な性格を持つ可能性が考えられる。



第41図 第2号堅穴建物跡実測図

(2) 道路跡

第1号道路跡（第42図 PL 6）

**位置** 調査区中央部南側のB 3i4～C 3a1区、標高19.5～185mの台地斜面部に位置している。

**重複関係** 第58・65号土坑、第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** B 3i4区から南西方向（N-130°-W）に延びている。C 3a2区の標高19m付近でわずかに屈曲（N-115°-W）し、C 3a1区まで、長さ17.7mにわたり確認できた。上幅182～2.10m、下幅1.08～1.16m、深さ6～60cmの溝状に掘り込んでいる。底面は硬化面が確認でき、南西方向に傾斜して延びている。

**覆土** ローム粒子を多く含んでおり、周囲から流れ込んだ土が、道路として利用されたことにより、踏み固められ硬化したと考えられる。

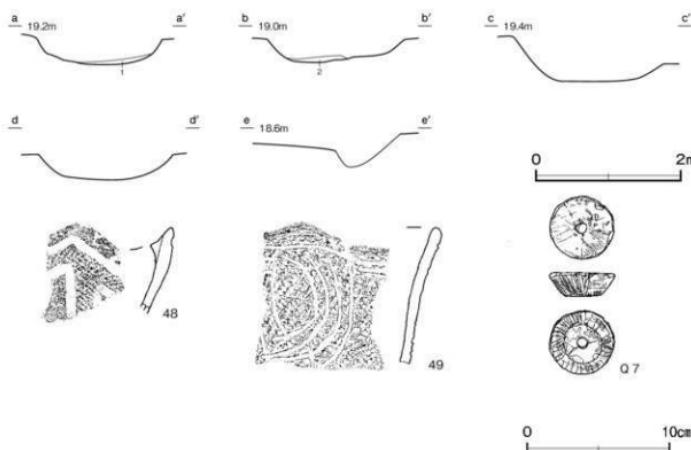
**土層解説**

1 周 色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

2 緩 周 色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

**遺物出土状況** 楕文土器片 94 点（深鉢）、土師器片 2 点（甕）、陶器片 1 点（甕）、石製品 1 点（紡錘車）、鉄製品 1 点（鍔）が出土している。いずれも、周辺からの混入と考えられる。

**所見** 台地平坦部から南側の低地間を移動するために使われたとを考えられる。時期は、伴う遺物がないため不明であるが、調査前の地境とも一致することから近世以降と考えられる。

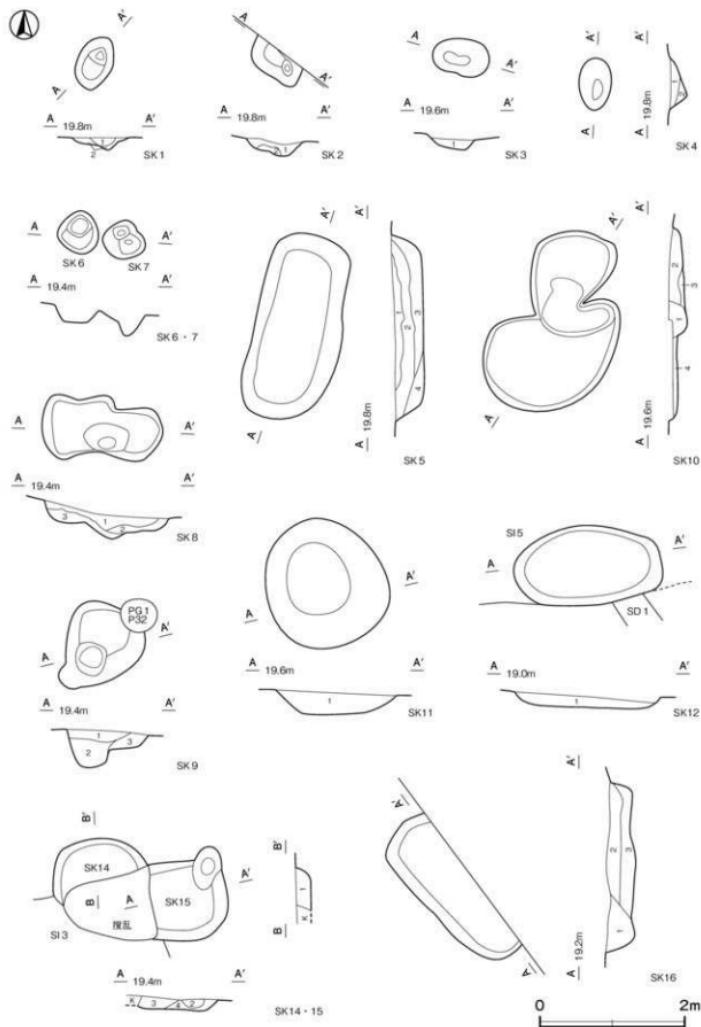


第42図 第1号道路跡、出土遺物実測図

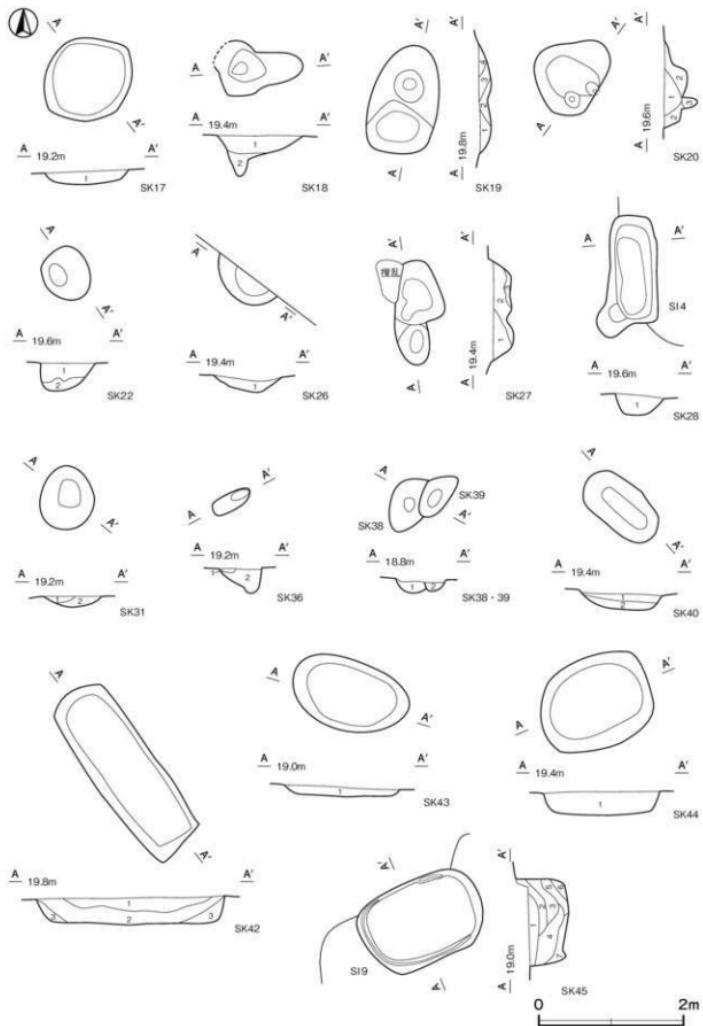
第1号道路跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
48	楕文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英、赤色粒子	にぶい橙	普通	塗刷による区画、單面織文LRを欠く	路盤硬化面中	5% PL 9 瓶名寺P.
49	楕文土器	深鉢	-	(9.5)	-	長石・石英、赤色粒子	にぶい橙	普通	單面織文LR、沈澱による強灰文、口縁部半周有質状工具による沈澱文	路盤硬化面中	5% PL 9 瓶之内P.
番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
Q7	紡錘車	4.5	1.5	0.7	42.90	滑石片岩	全面研磨	使用痕あり		路盤硬化面中	PL11

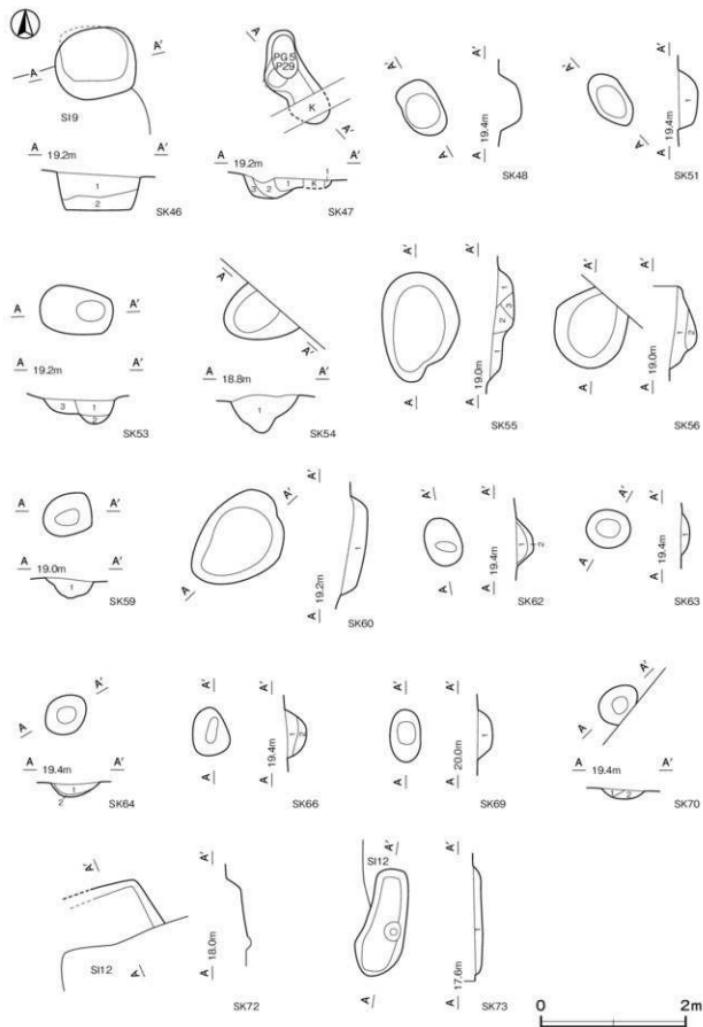
(3) 土坑



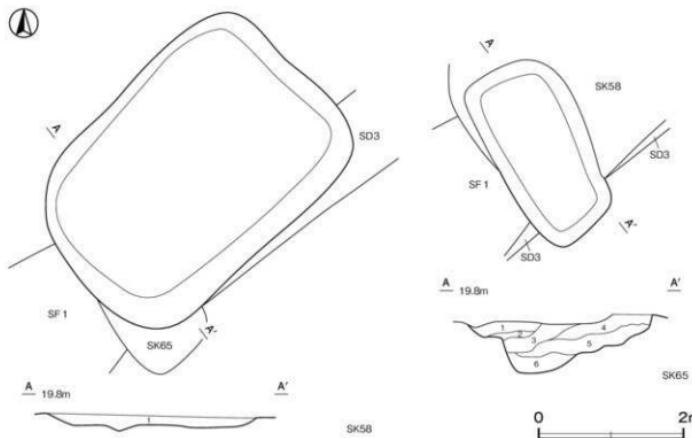
第43図 その他の土坑実測図（1）



第44図 その他の土坑実測図（2）



第45図 その他の土坑実測図（3）



第46図 その他の土坑実測図(4)

**第1号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 喜褐色 ローム粒子中量・炭化粒子微量

**第2号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量・炭化粒子微量

**第3号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量・炭化粒子微量

**第4号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 喜褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量

**第5号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 無土粒子・炭化粒子少量・ロームブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量・ロームブロック・無土粒子微量
- 3 喜褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量
- 4 喜褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量

**第6号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量・炭化粒子微量
- 2 喜褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量

**第7号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック中量・無土粒子・炭化粒子微量
- 2 喜褐色 ロームブロック中量・無土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

**第8号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック中量・無土粒子・炭化粒子微量
- 2 喜褐色 ロームブロック中量・無土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 黑褐色 ロームブロック少量

**第11号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

**第12号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量・炭化粒子微量

**第14・15号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 3 喜褐色 ロームブロック少量・燒土粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子中量

**第16号土坑土層解説**

- 1 黑褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック中量・炭化粒子微量
- 3 喜褐色 ロームブロック中量・炭化粒子微量

**第17号土坑土層解説**

- 1 黑褐色 ローム粒子中量・炭化粒子微量

**第18号土坑土層解説**

- 1 黑褐色 ロームブロック・燒土ブロック中量・炭化粒子微量
- 2 喜褐色 ローム粒子中量

**第19号土坑土層解説**

- 1 喜褐色 炭化粒子少量・ローム粒子微量
- 2 喜褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量
- 3 喜褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 喜褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**第20号土坑土層解説**

- 1 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

#### 第 22 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック多量。炭化粒子微量  
2 褐 色 ローム粒子多量

#### 第 26 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量

#### 第 27 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 褐 色 ロームブロック多量。炭化物微量  
2 黒 褐 褐 色 ロームブロック中量。炭化物微量  
3 褐 色 ローム粒子多量

#### 第 28 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 褶 色 ローム粒子中量。炭化粒子微量

#### 第 31 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 黑 褐 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量

#### 第 36 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 褶 色 炭化粒子少量。ローム粒子微量  
2 黑 褐 褶 色 炭化粒子少量。ロームブロック微量

#### 第 38・39 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量  
2 黑 褐 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量

#### 第 40 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 褶 色 ロームブロック少量。炭化物微量  
2 褐 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 42 号土坑土層解説

- 1 黑 褐 褶 色 ロームブロック中量。燒土粒子少量。炭化粒子微量  
2 暗 褐 褶 色 ロームブロック多量。燒土粒子少量。炭化粒子微量  
3 暗 褐 褶 色 ロームブロック中量

#### 第 43 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 褶 色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量

#### 第 44 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 褶 色 ロームブロック中量。炭化粒子微量

#### 第 45 号土坑土層解説

- 1 黑 褐 褶 色 ロームブロック・炭化粒子少量。燒土ブロック微量  
2 暗 褐 褶 色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量  
3 黑 褐 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量  
4 暗 褶 色 ローム粒子多量。炭化物・燒土粒子微量  
5 褐 褶 色 ロームブロック中量。炭化物・燒土粒子微量  
6 明 褶 褶 色 ロームブロック多量。炭化物・燒土粒子微量  
7 暗 褶 褶 色 ロームブロック多量。炭化粒子少量。燒土粒子微量

#### 第 46 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ロームブロック多量。炭化粒子少量  
2 暗 褶 褶 色 ロームブロック中量。炭化物微量

#### 第 47 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量  
2 黑 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量  
3 暗 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化物微量

#### 第 51 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 黑 褶 褶 色 ロームブロック中量。炭化粒子微量  
3 暗 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量

#### 第 54 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 55 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量  
2 黑 褶 褶 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量  
3 暗 褶 褶 色 ローム粒子中量

#### 第 56 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 炭化粒子少量。ロームブロック・燒土粒子微量  
2 暗 褶 褶 色 ローム粒子少量

#### 第 58 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ロームブロック中量。粘土ブロック少量。燒土粒子・炭化粒子微量

#### 第 59 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 60 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 炭化粒子少量。ロームブロック微量

#### 第 62 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 暗 褶 褶 色 ロームブロック微量

#### 第 63 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 64 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 暗 褶 褶 色 ロームブロック微量

#### 第 65 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量  
2 明 褶 褶 色 ローム粒子多量  
3 黑 褶 褶 色 ロームブロック中量。燒土ブロック少量。炭化粒子微量  
4 黑 褶 褶 色 ロームブロック多量。燒土ブロック少量。炭化粒子微量  
5 暗 褶 褶 色 ロームブロック多量。燒土ブロック・炭化粒子少量  
6 黑 褶 褶 色 ローム粒子中量。炭化粒子・燒土粒子少量

#### 第 66 号土坑土層解説

- 1 暗 褶 褶 色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 黑 褶 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 69 号土坑土層解説

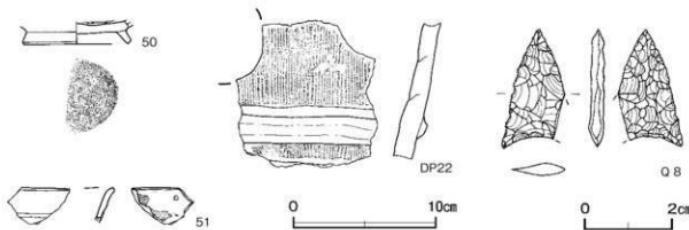
- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック・炭化粒子微量

#### 第 70 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量

#### 第 73 号土坑土層解説

- 1 黑 褶 褶 色 ロームブロック中量。炭化物微量



第47図 その他の土坑出土遺物実測図

第45・46・60・73号土坑出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	被 沢	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
50	土師器	高台付壺	-	(16)	(72)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	良好 内面へきつき 底部回転へり 剥離 内面黒色処理	SK45 覆土中	5%	
51	土師器	壺	-	(21)	-	長石・石英	灰褐色	良好 内面鉄錆状物質・緑青苔着	SK73 覆土中	3% PL12 鉄錆第一選出	
DP22	円筒埴輪	輪	(10.2)	(9.8)	1.3	(187.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面部輪のハケ目 凸唇無ナデ 内面輪積面 ナグリ	SK46 覆土中	PL10
Q8	漆	漆	2.7	(1.5)	0.4	(1.1)	チャート	凹凸無茶刷 両面押正剥離 一部欠損		SK60 覆土中	PL11

表6 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 横		被 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 3g5	N - 33° - E	椭円形	0.75 × 0.48	30	凹斜	盤状	人為	縄文土器	
2	A 3j4	N - 53° - W	[長方形]	0.78 × 0.36	23	外傾	盤状	人為		
3	B 3b5	N - 77° - W	椭円形	0.80 × 0.52	26	外傾	盤状	人為		
4	B 3l3	N - 4° - E	椭円形	0.73 × 0.45	24	外傾	平坦	人為		
5	B 3h3	N - 13° - E	長方形	2.60 × 1.22	40	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器	
6	B 3b6	-	円形	0.58 × 0.57	25	外傾	平坦	不明	土師器	
7	B 3b6	-	円形	0.57 × 0.53	27 ~ 34	外傾	凹凸	不明		
8	B 3b6	N - 87° - W	不整長方形	1.70 × 0.80	12 ~ 48	凹斜	外傾	凹凸	人為	
9	B 3c6	N - 77° - E	不整円形	1.32 × 1.08	33 ~ 44	外傾	凹凸	人為		本跡→PG I PG2
10	B 3b5	N - 9° - E	不定形	2.50 × 1.72	25	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器、鐵製品	2系重複の可能性
11	B 3c5	N - 29° - W	椭円形	1.49 × 1.33	30	紙斜	平坦	人為	縄文土器、土師器	SI 3 → 本跡
12	B 3d8	N - 87° - E	椭円形	2.05 × 1.10	24	紙斜	平坦	人為	土師器	SI 3 → 本跡 SI 3 新旧不明
14	B 3c5	N - 62° - E	[椭円形]	1.38 × (0.58)	21	紙斜	平坦	人為		SI 3 → 本跡 SK15
15	B 3c6	N - 5° - W	楕丸底方錐形	1.13 × (1.05)	16	紙斜	平坦	人為	縄文土器、土師器	SI 3、SK14 + 本跡
16	B 3c6	N - 39° - W	[長方形]	2.33 × (0.84)	37	紙斜	平坦	人為	縄文土器、土師器	
17	B 3d7	-	円形	1.20 × 1.17	17	紙斜	平坦	不明		
18	B 3e7	N - 84° - E	椭円形	1.15 × 0.75	58	直立	外傾	人為		
19	B 3f2	N - 9° - E	椭円形	1.50 × 0.96	20	紙斜	平坦	人為		SI 14 新旧不明
20	B 3h8	-	円形	1.16 × 0.91	43	紙斜	盤状	人為	土師器	
22	B 3e6	N - 36° - W	椭円形	0.73 × 0.65	40	[12.2直立]	外傾	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	未 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
26	B 3 a5	N - 53° - W	[橢円形]	0.95 × (0.36)	22	外傾 [注記あり]	平坦	人為		
27	B 3 c6	-	不定形	1.44 × (0.43)	35	外傾 [注記あり]	平坦	人為	土師器	
28	B 3 d6	N - 4° - E	不定形	1.66 × (0.36)	24	外傾 [注記あり]	平坦	人為		SI 4 → 本跡
31	B 4 j1	N - 5° - E	橢円形	0.89 × 0.76	20	外傾 [注記あり]	平坦	人為		
36	C 3 a0	N - 65° - E	橢円形	0.57 × 0.23	36	ほぼ直立 [注記あり]	直状	人為	土師器	
38	B 4 j3	N - 18° - E	橢円形	0.76 × (0.45)	9	傾斜	凹凸	人為		本跡 → SK39
39	B 4 j3	N - 27° - E	橢円形	0.68 × 0.32	12	傾斜	凹凸	人為	土師器	SK38 → 本跡
40	B 4 j1	N - 50° - W	橢円形	1.20 × 0.63	22	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
42	B 2 g0	N - 34° - W	長方形	2.63 × 0.88	38	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
43	B 2 i6	N - 70° - W	橢円形	1.65 × 0.99	12	傾斜	平坦	人為		
44	B 2 b4	N - 68° - E	長方形	1.61 × 1.26	33	外傾	平坦	人為		
45	B 2 b4	N - 65° - E	長方形	1.72 × 1.14	47	ほぼ直立 [注記あり]	平坦	人為	土師器	SI 9 → 本跡
46	B 2 b5	N - 77° - E	橢円形	1.13 × 0.96	55	直立	平坦	人為	土師器、土製品	SI 9 → 本跡
47	B 4 i1	N - 36° - W	不整橢円形	1.20 × 0.62	36	外傾 [注記あり]	平坦	人為	縄文土器	本跡 → PG 5 P29 2基重複の可能性
48	B 3 g9	N - 34° - W	橢円形	0.82 × 0.54	30	外傾 [注記あり]	平坦	人為		
51	B 3 i0	N - 36° - W	橢円形	0.83 × 0.47	19	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
53	B 3 d0	N - 81° - W	橢円形	1.02 × 0.66	37	外傾 [注記あり]	平坦	人為	縄文土器	
54	B 3 d0	N - 48° - W	[橢円形]	0.92 × (0.64)	63	外傾	平坦	人為		
55	B 4 g1	N - 2° - W	橢円形	1.32 × 1.07	27	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
56	B 4 g1	N - 51° - E	[橢円形]	1.04 × (0.99)	34	外傾	平坦	人為	縄文土器、調片	
58	B 3 i4	N - 48° - E	椭丸長方形	4.22 × 2.95	21	傾斜	平坦	人為	縄文土器	SI56, SF 1, SD 3 → 本跡
59	B 3 i0	N - 71° - E	橢円形	0.70 × 0.57	26	傾斜	不明	人為	縄文土器	
60	B 3 g0	N - 36° - E	橢円形	1.47 × 1.10	25 ~ 25	傾斜 外傾 直立 外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器、石器	
62	B 3 i0	N - 23° - W	橢円形	0.69 × 0.50	27	外傾	平坦	人為		
63	B 3 i0	N - 88° - W	橢円形	0.62 × 0.54	14	傾斜	直状	人為	縄文土器	
64	B 3 i0	N - 45° - E	橢円形	0.63 × 0.52	22	傾斜	直状	人為		
65	B 3 i4	N - 30° - W	椭丸長方形	2.60 × 1.40	70	傾斜	凹凸	人為	縄文土器、土師器	SF 1, SD 3 → 本跡 → SK58
66	B 3 i9	N - 6° - W	橢円形	0.67 × 0.51	25	外傾	直状	人為	縄文土器、土師器	
69	B 3 i9	N - 1° - E	橢円形	0.73 × 0.42	20	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
70	B 3 i9	N - 43° - E	[橢円形]	0.60 × (0.42)	12	傾斜	平坦	人為	縄文土器	
72	C 2 b6	N - 71° - E	[長方形]	(0.80) × (0.70)	26	外傾	平坦	不明	土師器	SI 12 → 本跡
73	C 2 b0	N - 12° - E	橢円形	1.50 × 0.65	10	傾斜	平坦	人為	土師器	SI 12 → 本跡

#### (4) 溝跡

##### 第3号溝跡（第48図 PL 6）

**位置** 調査区中央部から南西部にかけてのB 3 i6～C 2 b0区、標高19.5～18.5mの台地斜面部に位置している。

**重複関係** 第12号堅穴建物跡、第1号道路跡、第7号溝跡を掘り込み、第58・65号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** B 3 i6区から南東方向（N - 142° - E）へ直線的に7.0 m延び、B 3 g7区でL字状に屈曲して、南西方向（N - 126° - W）に17.4 m延び、B 3 i4区で第1号道路跡の掘り込みを利用して延び、C 3 a2区で再び本跡の掘り込みが確認された。南西方向（N - 126° - W）に10.8 m延び、C 2 b0区の第12号堅穴建物跡中央部までは確認されたが、その先は斜面のため遺存していない。のべ35.2 mにわたって確認し、総延長は第1号道路跡の掘り込みを利用した部分も含めると43.8 mである。規模は、上幅0.50～1.30 m、下幅0.12～0.58 mで、確認面からの深さは30～58cmである。断面は、U字状で、壁は外

傾している。底面は、南西方向に傾斜している。

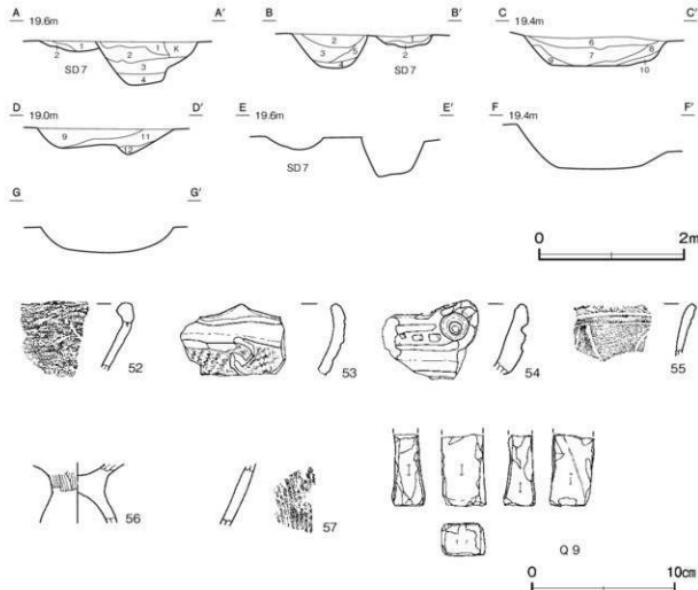
**覆土** 12層に分層できる。各層に、ブロック状の堆積状況が見られ、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	7 棕褐色	ローム粒子多量
2 黄褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	8 黑褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
3 棕褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量	9 棕褐色	ロームブロック中量・炭化粒子少量
4 明褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量	10 棕褐色	ローム粒子少量
5 單褐色	ロームブロック多量・炭化粒子微量	11 灰褐色	ローム粒子中量・粘土ブロック少量・炭化粒子微量
6 灰褐色	ロームブロック中量・粘土ブロック少量	12 棕褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片315点(深鉢311、浅鉢4)、土師器片31点(壺4、高台付壺2、甌24、高杯1)、土師質土器3点(小皿、擂鉢、甌)、陶器1点(碗)、磁器1点(碗)、石器6点(砥石)、鉄製品1点(不明)、焼成粘土塊1点(46.3g)、鐵滓2点(69.3g)、剥片1点、甌6点が出土している。いずれも細片で覆土中に散在して出土していることから、埋め戻しの過程で混入したと考えられる。

**所見** 台地平坦部から斜面部まで伸び、底面が斜面に沿った傾斜であることから、台地平坦部から排水する役割があったと考えられる。また、調査前の地境とも一致することから、区割りを兼ねていたと考えられる。時期は近世以降と考えられる。



第48図 第3・7号溝跡・出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	深さ	底質	断土	色調	地城	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	陶文土器	浅鉢	-	(4.6)	-	長石・石英	褐 普通	多方向のナデ 内面磨き	覆土中 施土内含	5%	
53	陶文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英	にふい粉 普通	単面研文LR→沈線による逆S文字	覆土中 施土内含	PL 9 施土内含	
54	陶文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	にふい粉 普通	口部底面による区画内に刺突文→円状の縦帶	覆土中 施土内含	5% PL 9 施土内含	
55	陶文土器	浅鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・黄鐵	にふい粉 普通	網目沈線文	覆土中 施土内含	5% PL 9 施土内含	
56	土器部	高坪	-	(4.1)	-	長石・石英・黄鐵	明暗 普通	外周延びのハケ目	覆土中 施土内含	5% PL 9 施土内含	
57	土質土器	罐跡	-	(4.3)	-	長石・石英・中纖	褐 普通	7本以上一單位の罐目	覆土中	5%	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	磁石	(4.9)	(3.1)	2.1	(51.0)	磁灰岩	紙面5面 他は破断面	覆土中	PL11

## 第2号溝跡土層解説

1 埋 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

## 第4号溝跡土層解説

1 黒 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 埋 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

## 第5号溝跡土層解説

1 埋 色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 埋 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

## 第6号溝跡土層解説

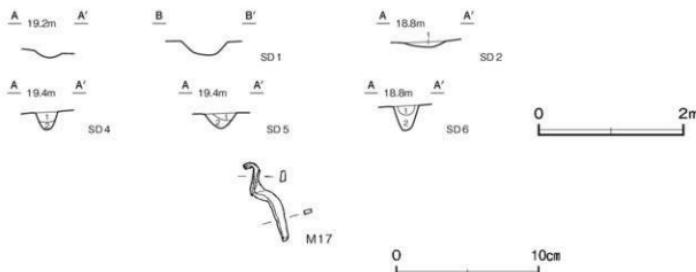
1 埋 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 埋 色 ロームブロック・炭化粒子微量

## 第7号溝跡土層解説

1 底 色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、燒土粒子微量

2 埋 色 ローム粒子中量



第49図 その他の溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第49図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 17	釘	(5.4)	0.8	0.3~0.5	(7.3)	鐵	頭部折り曲げにより作出 断面菱方形	覆土中	PL11

表7 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模			断面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
1	B 3.66~B 4.1d	N~38°~W	直線状	28.17	0.58~ 0.68	0.15~ 0.50	8~18	U字状	外傾	不明	土器部、鐵製品、繩
2	B 2.19~C 2.6d	N~28°~W	直線状	9.20	0.66~ 0.76	0.20~ 0.36	6~8	U字状	外傾	人鳥	陶文土器、土器部

番号	位 置	方 向	平 面 形	規 模			断 面	横 面	質 土	主な出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
3	B 3.66 - C 2.90 N - 147° - E N - 126° - W	L字状	(40.80)	0.50 ~ 1.30	0.12 ~ 0.58	30 ~ 58	U字状	外傾	人為	両立式梯、土器類、1箇質土器 陶瓦器、石器、貝殻品	SD 12・SF 1, SD 7 → SD 10・SF 58・65
4	B 2.17 - B 2.18 N - 137° - W N - 135° - E	L字状	(19.88)	0.32 ~ 0.66	0.08 ~ 0.48	11 ~ 45	U字状	外傾	人為	土器類	SK 49 → 本跡
5	C 3.69 ~ C 3.69 N - 126° - E	矩形	(29.06)	0.40 ~ 0.60	0.06 ~ 0.24	13 ~ 20	U字状	外傾	人為	繩文土器	
6	B 4.22 - B 4.13 N - 140° - E	直線状	(8.52)	0.27 ~ 0.36	0.10 ~ 0.13	17 ~ 35	U字状	外傾	人為	出は直2	繩文土器
7	B 3.66 ~ B 3.66 N - 147° - E N - 122° - W	L字状	(11.52)	0.26 ~ 0.28	0.12 ~ 0.50	6 ~ 18	U字状	外傾	人為	繩文土器、土器類	本跡 → SD 3

### (5) ピット群

今回の調査でピット群5か所を確認した。各ピット群の配置状況から建物跡は想定できない。出土した遺物はいずれも細片で、時期を判断することはできなかった。配置図は全体図(第3図)に掲載し、ピットの計測表のみを提示する。

第1号ピット群計測表

ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ
1	B 2.4	円形	37	34	15	17	B 3.65	椭円形	52	36	13	33	B 3.e8	椭円形	41	26	22
2	B 2.4	椭円形	40	36	20	18	B 3.d5	椭円形	50	45	33	34	B 3.d7	椭円形	49	31	28
3	B 3.a6	円形	67	62	21	19	B 3.d7	椭円形	49	43	24	35	B 3.e8	椭円形	40	31	28
4	B 3.b5	椭円形	80	66	15	20	B 3.e7	椭円形	69	52	10	36	B 3.g9	円形	42	40	24
5	B 3.b5	円形	25	25	11	21	B 3.e7	椭円形	54	43	45	37	B 3.g9	円形	50	47	37
6	B 3.b5	円形	55	54	13	22	B 3.e7	椭円形	55	43	21	38	B 3.g8	円形	49	48	19
7	B 3.b5	椭円形	49	42	20	23	B 3.e7	椭円形	43	38	15	39	B 3.c6	椭円形	72	44	29
8	B 3.a5	椭円形	89	48	37	24	B 3.e7	椭円形	45	33	52	40	B 3.d6	[椭円形]	64	(40)	34
9	B 3.c4	椭円形	71	56	68	25	B 3.e7	椭円形	73	50	41	41	B 3.d7	[円形]	50	(16)	12
10	B 3.b6	椭円形	57	44	19	26	B 3.e7	椭円形	40	29	36	42	B 3.d7	椭円形	60	40	81
11	B 3.b6	椭円形	63	53	28	27	B 3.e7	椭円形	66	47	31	43	B 3.d7	椭円形	98	46	46
12	B 3.d5	椭円形	64	52	18	28	B 3.i9	椭円形	65	57	19	44	B 3.d6	椭円形	40	35	18
13	B 3.c7	椭円形	54	45	27	29	B 3.e6	椭円形	42	35	27	45	B 3.c5	椭円形	51	42	25
14	B 3.c7	椭円形	76	54	28	30	B 3.e6	椭円形	42	34	22	46	B 3.c5	[椭円形]	43	(18)	14
15	B 3.b6	椭円形	55	28	29	31	B 3.a5	[椭円形]	79	(61)	20						
16	B 3.c7	椭円形	69	65	25	32	B 3.e6	椭円形	49	43	30						

第2号ピット群計測表

ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ
1	B 3.14	椭円形	24	20	10	4	B 3.f2	[椭円形]	40	(34)	22	7	B 3.16	円形	77	75	26
2	B 3.f3	円形	55	50	20	5	B 3.b4	円形	30	28	14	8	B 3.g4	円形	30	26	14
3	B 3.g4	円形	37	34	15	6	B 3.b3	椭円形	40	30	24	9	B 3.g4	椭円形	74	52	20

第3号ピット群計測表

ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			ピット番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ				長軸(歩)	短軸(歩)	深さ
1	C 3.a0	椭円形	25	20	18	6	B 3.j0	円形	34	33	11	11	C 4.e2	円形	24	22	26
2	B 3.j0	円形	35	34	21	7	B 3.j0	椭円形	44	25	16	12	C 4.e2	円形	26	25	10
3	B 3.d9	円形	28	28	14	8	B 4.j1	円形	25	24	33	13	C 3.a0	円形	25	25	19
4	C 3.a0	椭円形	28	20	15	9	C 4.a1	椭円形	45	32	30	14	C 3.a0	椭円形	26	20	16
5	B 4.j2	椭円形	35	31	34	10	C 4.e2	円形	20	20	33	15	B 4.j1	椭円形	32	27	29

第4号ピット群計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(左)	短軸(右)	深さ				長軸(左)	短軸(右)	深さ				長軸(左)	短軸(右)	深さ
1	B 2 j0	楕円形	55	32	16	9	B 2 g6	楕円形	60	52	38	17	B 2 i6	円形	47	45	25
2	B 2 j0	楕円形	48	30	13	10	B 2 g6	楕円形	55	48	27	18	B 2 i6	円形	45	45	11
3	C 2 a9	楕円形	57	34	17	11	B 2 i6	楕円形	45	34	26	19	B 2 f9	楕円形	88	58	21
4	C 2 a9	楕円形	31	25	11	12	B 2 i7	楕円形	60	52	21	20	B 3 i1	楕円形	86	52	24
5	B 2 i9	楕円形	64	37	18	13	B 2 g5	楕円形	50	41	11	21	B 3 i2	円形	38	36	20
6	B 2 i9	楕円形	93	53	14	14	B 2 g5	円形	48	45	27	22	B 3 i2	楕円形	64	54	35
7	B 2 i9	楕円形	68	38	18	15	B 2 i7	楕円形	67	48	16	23	B 3 i2	楕円形	44	35	31
8	B 2 g8	楕円形	32	28	40	16	B 2 i7	楕円形	64	49	24						

第5号ピット群計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(左)	短軸(右)	深さ				長軸(左)	短軸(右)	深さ				長軸(左)	短軸(右)	深さ
1	B 3 g9	楕円形	46	36	15	16	B 4 g1	円形	31	30	7	31	B 4 i1	楕円形	60	34	15
2	B 3 g9	円形	30	30	18	17	B 4 g1	楕円形	70	60	30	32	B 3 i0	楕円形	40	34	17
3	B 3 g9 (楕円形)	32 (30)	14	18	18	18	B 4 h1	楕円形	39	29	13	33	B 3 i0	楕円形	46	32	19
4	B 3 g9 (楕円形)	62 (44)	8	19	19	B 4 g1	円形	28	28	10	34	B 3 i0	楕円形	56	50	26	
5	B 3 g9	楕円形	86	62	24	20	B 4 g1	楕円形	40	30	18	35	B 4 h1	楕円形	44	34	10
6	B 3 h0	楕円形	52	42	27	21	B 4 g1	楕円形	58	43	20	36	B 4 h1	円形	32	30	15
7	B 3 h0	円形	32	32	15	22	B 4 g1	楕円形	34	30	10	37	B 3 i0	楕円形	38	34	15
8	B 3 h0	円形	35	35	26	23	B 4 g1	楕円形	48	43	20	38	B 3 h0	楕円形	44	32	16
9	B 3 h0	楕円形	93	63	16	24	B 4 g2	楕円形	46	32	10	39	B 3 h0	楕円形	38	28	4
10	B 3 g9	楕円形	50	42	13	25	B 4 h2	円形	60	60	8	40	B 3 h0	楕円形	22	16	8
11	B 3 g9	楕円形	100	44	32	26	B 4 h1	円形	24	22	7	41	B 3 h0	楕円形	30	26	12
12	B 3 g9	楕円形	40	38	18	27	B 4 i1	楕円形	70	52	25	42	B 4 h1	楕円形	46	40	12
13	B 3 g9 (楕円形)	26 (20)	6	28	28	B 4 i1	円形	30	30	12	43	B 3 h0	楕円形	58	42	26	
14	B 3 g9	円形	72	50	29	29	B 4 i1	楕円形	60	34	40	44	B 3 h0	楕円形	58	40	15
15	B 4 g1	楕円形	60	48	22	30	B 4 i1	楕円形	56	26	12						



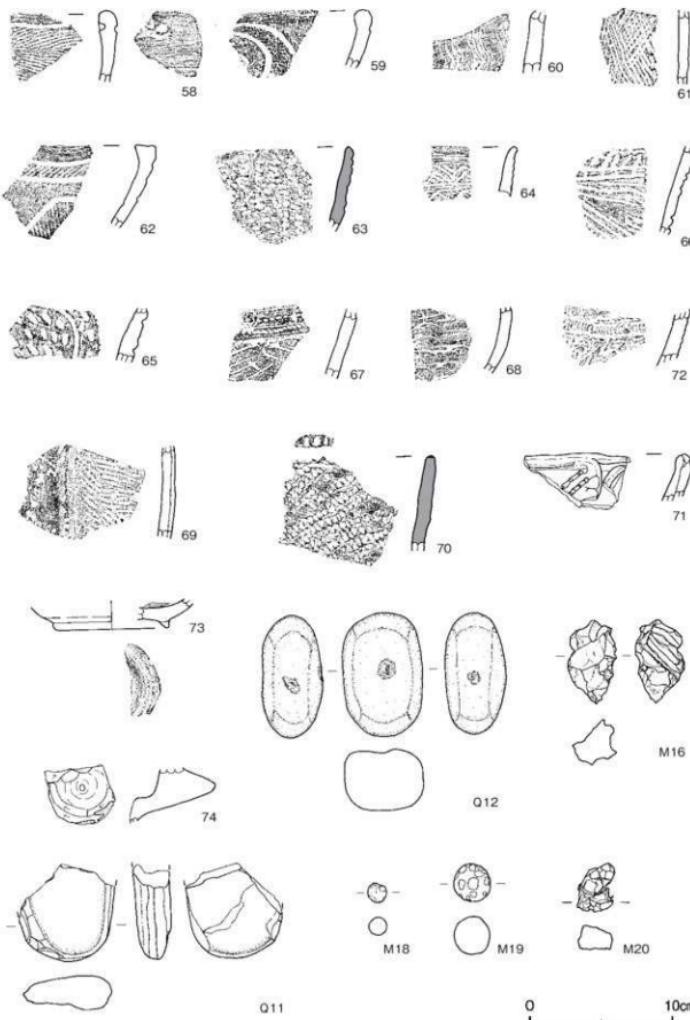
第50図 第5号ピット群出土遺物実測図

第5号ピット群出土遺物観察表（第50図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	鉢	21	14	0.3	0.5	チャート	円底無茎鉢 背面押付剥離	P35 地上中 PL11	

## (6) 遺構・外出土遺物

今回の調査で出土した表土や遺構に伴わない遺物については、実測図（第51図）と観察表を掲載する。



第51図 遺構外出土遺物実測図

遺構出土遺物観察表（第51図）

番号	性 別	器種	口径	器高	底径	断 土	色 調	地成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
58	調文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	単脚彫文 RL	表土	5% PL10 内底
59	調文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	沈継による区画 単脚彫文 LR を光塗	表土	5% PL10 器名記式
60	調文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	半裁竹管状工具による沈継文	表土	5% PL10 浮島式
61	調文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふい粉	普通	複位の沈継文・斜位の沈継文	表土	5% PL10 浮島式
62	調文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英	にふい粉	普通	沈継による区画 単脚彫文 LR を光塗	表土	5% PL10 器名記式
63	調文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英・鐵継	にふい粉	普通	単脚彫文 RL をランダムに施文	表土	5% PL10 黒墨式
64	調文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英	にふい粉	普通	手裁竹管による複位の沈継文と山形文を交互に施文	表土	5% PL10 浮島式
65	調文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	弧状の沈継文・刺突文	表土	5% PL10 器名記式
66	調文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母	にふい粉	普通	沈継文	表土	5% PL10 浮島式
67	調文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英	にふい粉	普通	沈継文 斜位の筋目	表土	5% PL10 器名記式
68	調文土器	深鉢	-	(4.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい粉	普通	変形爪型文	表土	5% PL10 浮島式
69	調文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英	明赤褐	普通	沈継による区画 単脚彫文 RL を光塗	表土	5% PL10 器名記式
70	調文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・鐵継	にふい粉	普通	手裁竹管による複位の沈継文 RL 口沿部削み	表土	5% PL10 器名記式
71	調文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	複位の沈継文 差下の捺袋 口沿部外間に	表土	5% PL10 器名記式
72	調文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英	にふい粉	普通	手裁波状文 斜位の沈継文 手裁竹管による圧痕 SI 3 豊土中	SI 3 豊土中	5% PL10 浮島式
73	土文器	高台付床	-	(2.0)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き 底部ハサギ切り 内面黒色処理	SI 8 豊土中	5% 二次焼成
74	土文器	瓶	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふい粉	普通	把手部 内面削離 工具により内面に穿孔	表土	5%
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
Q 11	體口#	(6.7)	(6.7)	(2.7)	(136.4)	安山岩	未成品	刃部は打撃による成型後研ぎ出し	SI 3 豊土中		
Q 12	円石	8.5	5.5	4.3	3029	安山岩	凹み 3カ所	側面研磨 磨石兼用	表土		
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
M 16	跳溝	(5.8)	(3.4)	(3.1)	(42.0)	鐵	ガラス質に浮遊 細かい発泡 や埋付着 着色性なし 流動溝	SK72付近	PL12		
M 18	跳沟玉	13	1.3	1.3	11.63	鈴	三勾玉		表土	PL11	
M 19	跳沟玉	2.6	2.5	2.6	64.66	鐵	三十九玉		SI 8 豊土中	PL11	
M 20	跳溝	(3.4)	(2.7)	(1.6)	(27.5)	鐵	表面崎状に剥離 着色性あり 合鐵熱溶		表土	PL12	

## 第4節 まとめ

### 1 はじめに

今回の調査で、堅穴建物跡15棟（縄文時代6・平安時代8・時期不明1）、道路跡1条（時期不明）、土坑63基（縄文時代5・平安時代6・時期不明52）、溝跡7条（時期不明）、ピット群5か所（時期不明）を確認し、縄文時代と平安時代の集落跡を中心とする複合遺跡であることが判明した。縄文土器、土師器、須恵器を中心に、土製品、石器・石製品、鉄製品などが出土している。また、平安時代の堅穴建物跡の覆土中から、製鉄や鍛冶、銅鋳造に関連する遺物が出土している。ここでは、時代順に各時代の遺構と出土遺物を概観し、当遺跡の特徴である製鉄や鍛冶、銅鋳造について、若干の考察を加えることでまとめたい。

### 2 各時代の様相

#### (1) 縄文時代

当時代の遺構として、堅穴建物跡6棟と土坑5基を確認した。堅穴建物跡は、削平を受けて覆土が確認できず、炉とピットの広がりから建物範囲を推定した建物が多く、遺存状況は悪い。そのため、出土遺物は炉やピットから少量確認されたのみである。時期については、極少量かつ細片で時期不明な第13・14号堅穴建物跡を除き、称名寺式の特徴がみられ、後期前葉に位置づけられる<sup>1)</sup>。建物構造については不明な点が多いが、いずれも主柱穴が不明瞭であり、壁柱穴とみられるピットが建物範囲の外周部を巡っている。これは中期後葉～後期中葉までの堅穴建物跡の形状の特徴と類似しており、当時期に位置づけることを補強できると考えられる。集落の存続については、第11号堅穴建物跡と第15号堅穴建物跡のように、壁柱穴が2列に巡り建て替えが想定され、かつ建物間で重複している例もあることから、当時期のなかでも幅が想定され、一定数の集落規模が考えられる。近隣での当時期の集落跡は調査事例が少ないが、当遺跡は、南側に旧飯沼の入江を臨み、この入江の周辺には、山口遺跡、四ツ谷遺跡、金戸遺跡などで後期の土器が確認されており<sup>2)</sup>。これらの遺跡と関係性を持ちながら生活が営まれていたと想定できる。

遺構外から、前期の黒浜式・浮島式に比定される土器が一定数出土している。当遺跡周辺の旧飯沼沿辺部では、黒浜式期の堅穴建物跡10棟が調査された大生郷遺跡<sup>3)</sup>のほかに、北から、後中丸北遺跡、後中丸南遺跡、前中丸遺跡、四ツ谷遺跡等で、当時期の土器が確認されている。今回の調査では、遺構は確認できなかったが、調査区域周辺でも生活が営まれていたと考えられる。また、わずかに中期の阿玉台Ⅱ式・加曾利EⅣ式、晩期の安行3b式とみられる破片も出土しており、中期や晚期においても断続的に土地利用が行われていたことがうかがえる。当遺跡を含む常総市の結城台地周辺では、海進の変遷に伴い、前期の関山式期～黒浜式期をピークに、その後は遺跡数が減少傾向を示すが、当遺跡の周辺には、阿玉台式I b～Ⅱ式期の堅穴建物跡3棟が確認された天王原遺跡<sup>4)</sup>、後晩期の貝塚が存在した金戸遺跡、多数の堅穴建物跡と遺物包含層が確認された築地遺跡<sup>5)</sup>など、中期から晩期に至る生活の痕跡が確認されている。そうした中で当遺跡においても土地利用が行われたと考えられる。

#### (2) 古墳時代

当時代の遺構は確認できなかったが、10世紀前葉の第4号堅穴建物跡の竈1の周囲を中心にして、円筒埴輪片が出土しており、竈の補強材に用いられたと考えられる。時期は、体部外面を縱方向のナデで仕上げる特徴が見られ、凸帯の形状などから6世紀前半に位置づけることができる。他に、時期不明な第46号土坑からは、6世紀後葉に位置づけられる外面ハケ目円筒埴輪も確認されている。いずれも他所からの

持ち込みと考えられるが、近隣では古墳の確認数自体が少ない。埴輪が確認されているのは、6世紀後半以降に位置づけられる東方約2kmに位置する下花島古墳群<sup>6)</sup>のみである。このため、北西約7kmに位置し、旧飯沼からの入江の東斜面に造られた常総市の陣屋埴輪窯跡<sup>7)</sup>のように、旧飯沼からの入江を南側に望む当遺跡の立地状況もあわせると、近隣に未発見の埴輪窯跡が存在している可能性がある。

### (3) 平安時代

当時代の遺構は、堅穴建物跡8棟、土坑6基を確認した。出土遺物から9世紀後葉～10世紀前葉を中心とする時期と考えられる。東方約0.6kmに位置する宮原前遺跡は、律令期の郷内における中心的な集落と考えられている。宮原前遺跡が9世紀中葉を最後に終焉すること<sup>8)</sup>と、当遺跡の成立時期が前後していることは、宮原前遺跡との関係性をうかがわせる。当遺跡と同時に位置づけられる集落跡は、岡田郡（豊田郡）域の鬼怒川西岸地域では、北約4.8kmに位置する常総市の塚前貝塚・五輪前遺跡<sup>9)</sup>で調査されている。また、旧飯沼西岸の猿島郡域内に属するが、西約2.6kmに坂東市の然山西遺跡<sup>10)</sup>がある。ともに9世紀後葉～10世紀前葉にかけての製鉄・鍛冶の遺構や遺物が出土していることは注目される。

集団の単位や堅穴建物跡の構造については、確認できた数が少なく、傾向について出すことはできない。平面形は、方形または長方形を示すが、時期での区別は見られない。南北軸についてても、9世紀後葉のものに比べ10世紀前葉が東に10度前後振れるようにみえるが、確認数が少なく断定できない。主柱穴と考えられるピットは不揃いまたは確認できず、出入り口施設に伴うピットのみが確認できた。内部構造については、第7号堅穴建物跡では、炉が付設されている。それ以外は、竈が付設されており、位置は不明な2棟を除き、北壁に3棟、東壁に1棟、北と東壁に一つづつが1棟確認されている。特徴的な竈の形状として、第3号堅穴建物跡で、竈の袖部に切石が確認されている。県西地域で石材を用いた竈は、下妻市の大堀東遺跡<sup>11)</sup>や宮原前遺跡、然山西遺跡で確認されており、当遺跡の東側に位置する宮原前遺跡は同様の砂岩の切石が竈の心材に使用されており、当地域の特徴と考えられる。また、竈が2か所確認された第4号堅穴建物跡では、古い竈1の周辺から円筒埴輪片が出土している。少なくとも3個体以上確認され、原位置を留めていないため、使用状況を復元することはできなかったが、竈の補強材として使用されたと考えられる。10世紀前葉の第9号堅穴建物跡と9世紀後葉の第12号堅穴建物跡からは、貯藏穴が確認されている。一辺3.9～4.8mほどで、それぞれ当遺跡の該期においては、堅穴建物跡の中で最大の床面積を持っている。いずれも、床面の北西部に位置し、貯藏穴の規模や深さも類似しており、時期差が存在することから、第12号堅穴建物跡から第9号堅穴建物跡に建て替えられた可能性がある。

9世紀後葉の第5号堅穴建物跡と第7号堅穴建物跡から、8世紀初頭前後と見られる土師器甕、須恵器甕の破片が出土している。混入の可能性も存在するが、調査区内では、同時期の遺構が確認されず、遺物も出土していないことから、第4号堅穴建物跡で円筒埴輪を竈の構築材に用いた例もあわせると、具体的な使用方法は不明であるが、集落内に二次利用のために持ち込まれたことも想定される。

今回の調査で、特徴的な遺物として、製鉄や鍛冶に関連する炉壁や鉄滓等、铸造に関連する銅付着土器、鋳型が堅穴建物跡の覆土中を中心に出土している<sup>12)</sup>。

第12号堅穴建物跡では、覆土上層に焼土塊とともに炉壁や鉄滓がまとまって投棄された状態で出土している。このほか、覆土中からは、大口径の羽口片も出土している。一緒に出土した鉄滓の中に炉内滓や流動滓が含まれており、製鉄炉から鉄を取り出し、選別を行った際の不要物を廃絶後の窪みに廃棄したと考えられる<sup>13)</sup>。近隣に製鉄炉の存在が推定され、投棄状況や南斜面部に位置する第12号堅穴建物跡の位置から、東簡のすでに土取りされた場所に存在した可能性が高い。鍛冶に関連する遺物は、第3号堅穴建

物跡から楕形鍛冶溝が出土している。炉が確認できず、鍛造片や粒状滓の出土がみられないことから、鍛冶工房とは判断できないが、近隣で作業が行われたことが推定される<sup>14)</sup>。旧飯沼沿いでは、古代の製鉄・鍛冶に関連する遺物が確認される遺跡が点在している。当遺跡から半時計回りに塚前貝塚・五輪前遺跡、八千代町の尾崎前山遺跡<sup>15)</sup>、菱毛道西遺跡<sup>16)</sup>、然山西遺跡では調査が行われ、製鉄や鍛冶に関連する遺構や遺物が出土している。

銅铸造に関連する遺物として、第12号堅穴建物跡の焼土塊周辺から埴掘に転用され縁青などが付着した土器器坏が、第9号堅穴建物跡の貯藏穴覆土中から鋳型<sup>17)</sup>が、それぞれ出土している。銅铸造に関連する遺構や遺物は、地域の中心的集落や寺院関連遺跡などで確認される事例<sup>18)</sup>が多く、近隣では、大堀東遺跡やつくば市の島名熊の山遺跡<sup>19)</sup>で、10世紀後葉の工房跡や遺物が確認されている。この他に、古河市川戸台遺跡でも9世紀代の鉄铸造の遺物とともに出土している<sup>20)</sup>。

今回の調査で、当集落では、製鉄や鍛冶、銅製品の生産が行われていたことが、遺物から明らかになつた。一方で、関連する遺構は確認できず、操業の姿は明らかではない。加えて、今回の調査では、分析を行っていないため、原料の入手先や鉄素材の供給先、付着している銅の組成等明らかではないことも多く、理化分析も含めた課題が残る。

### 3 まとめ

以上、当遺跡の遺構と出土遺物を時代別に概観し、製鉄・鍛冶・銅铸造の遺物についても考察してきた。縄文時代の集落跡は、後期前葉を中心とするが、前期から晩期の土器も出土しており、周辺での土地利用が想定される。平安時代に入ると、9世紀後半～10世紀前葉にかけて集落が営まれ、生業の一つとして、製鉄や鍛冶、銅铸造が行われていたと考えられる。

今回の調査は遺跡の一部であり、当遺跡の特色である製鉄や鍛冶、銅铸造に関連する遺構は確認されていない。近隣地域の調査の積み重ねや他遺跡の調査事例との比較検討により、具体性に富んだ当地域の様相が明らかになってくると思われる。今回の調査成果が、当地域における歴史解明に繋がることを期待したい。

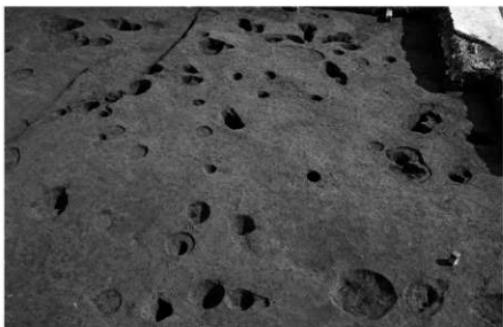
註

- 1) 縄文土器については、大川清・鈴木公雄「工業普通編『日本土器事典』」雄山閣 1996年12月に依拠した。
- 2) 水海道市埋蔵文化財総合調査会「水海道市埋蔵文化財総合分布地図」水海道市 1992年3月
- 3) 桜井二郎「大那郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書－大生郷遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書 XII 1981年3月
- 4) 小川貴行「天王原遺跡」茨城県教育財团文化財調査報告書 第371集 2013年3月
- 5) 現在整理作業中であり、今後見解が変更される可能性があり、引用は適慮願いたい。  
[2010]茨城県教育財团埋蔵文化財調査リーフレット 2010年10月
- 6) 水海道市埋蔵文化財調査報告書「上巣」水海道市 1984年3月
- 7) 石下町史編纂委員会「石下町史」石下町 1988年3月
- 8) 斎藤和浩「宮原前遺跡」茨城県教育財团文化財調査報告書 第335集 2011年3月
- 9) 松田政基・柴原洋考・宮本久一「塚前貝塚・五輪前遺跡(第一次調査)」常能郡教育委員会 2016年3月
- 10) 小川貴行・田村雅樹・佐藤一郎「然山西遺跡」茨城県教育財团文化財調査報告書 第379集 2013年3月
- 11) 近藤恒重・田中洋一「大堀東遺跡」茨城県教育財团文化財調査報告書 第269集 2009年3月
- 12) 製鉄・鍛冶・銅铸造に関連する遺物は、穴澤義功氏よりご教示を受けた内容を筆者が編集したものあり、事実誤認等による文責はすべて筆者にある。
- 13) 出土した卯盤は、堅形知の奥壁の羽口周辺部分である。と穴澤氏よりご教示をいただいている。
- 14) 楕形鍛冶溝から推定されるゆの大きさから精錬鍛冶段階の可能性が高い。と穴澤氏よりご教示をいただいている。
- 15) 阿久津久編「尾崎前山」八千代町教育委員会 1981年3月
- 16) 山野井哲夫・斎藤洋・大橋生・野村浩史「菱毛道西遺跡」県地域文化財コンサルタント 斎エフピコ 八千代町教育委員会 2009年7月
- 17) 脱土中に朽木を含むことから銅製品の鋳型とみられ、中央に孔があることから鍛造された製品は棒状で、錫杖の軸部の可能性が高い。と穴澤氏よりご教示をいただいている。
- 18) 神崎勝「治金考古学概論」雄山閣 2006年10月
- 19) 稲田義弘「島名熊の山遺跡」茨城県教育財团文化財調査報告書 第190集 2002年3月
- 20) 斎谷崇文・斎藤哲・熊坂正史・郡山雅惟「川戸台遺跡」古河市 古河市教育委員会 桐武藏文化財研究所 2012年9月

写 真 図 版



PL1



第6号竪穴建物跡



第15号竪穴建物跡  
ピット10遺物出土状況



第11-15号竪穴建物跡

PL2



第 24 号 土 坑  
遗 物 出 土 状 况



第 1 号 竖 穴 建 物 蹤



第 3 号 竖 穴 建 物 蹤  
遗 物 出 土 状 况



第3号竖穴建物跡

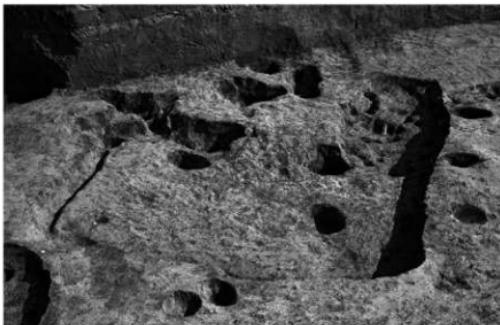


第4号竖穴建物跡  
遺物出土状況

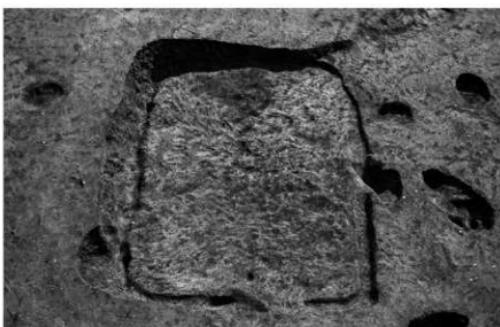


第4号竖穴建物跡

PL4



第5号竖穴建物跡



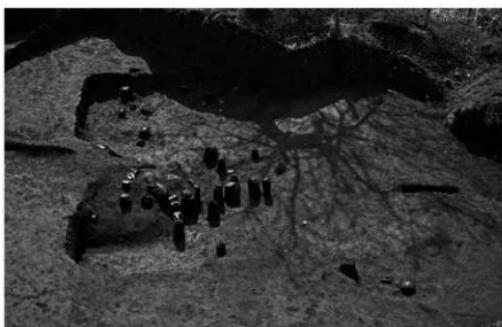
第7号竖穴建物跡



第9号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第9号竪穴建物跡



第12号竪穴建物跡  
遺物出土状況



第12号竪穴建物跡  
遺物出土状況

PL6



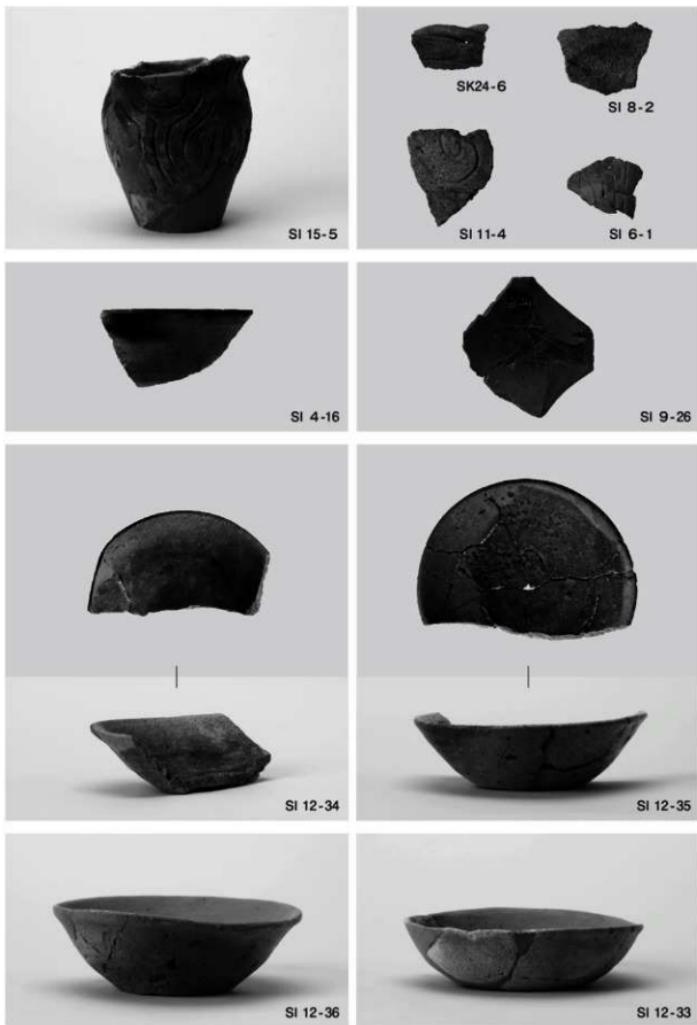
第12号竖穴建物跡



第1号道路跡



第3・7号溝跡



第4·6·8·9·11·12·15号竖穴建物跡、第24号土坑出土土器

PL8

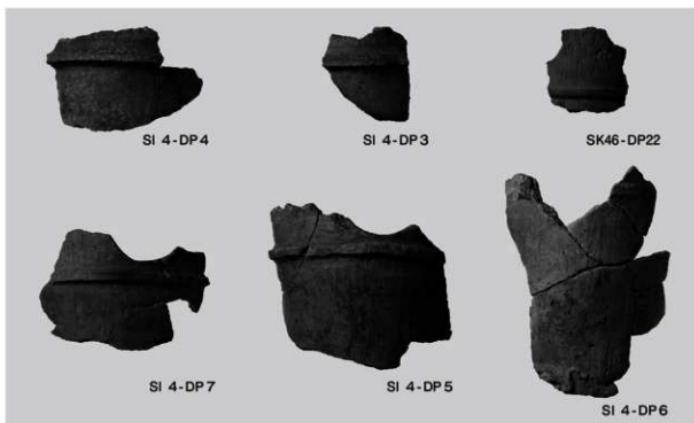
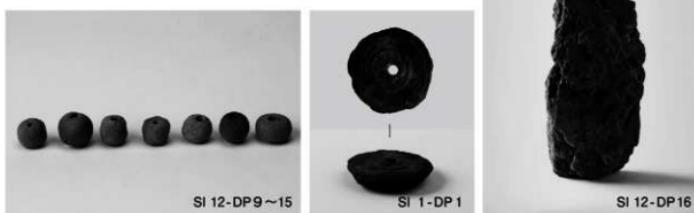
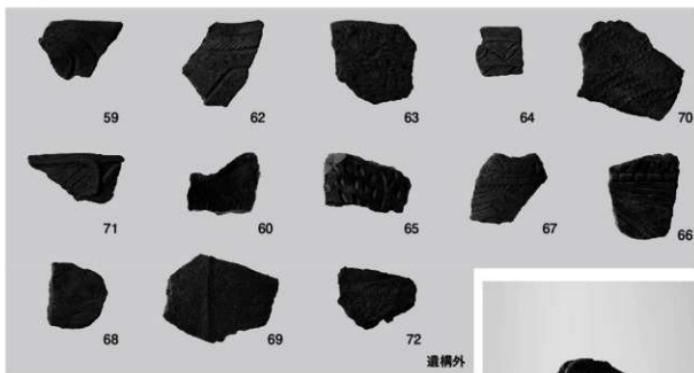


第3·4·9·12号竖穴建物跡出土土器

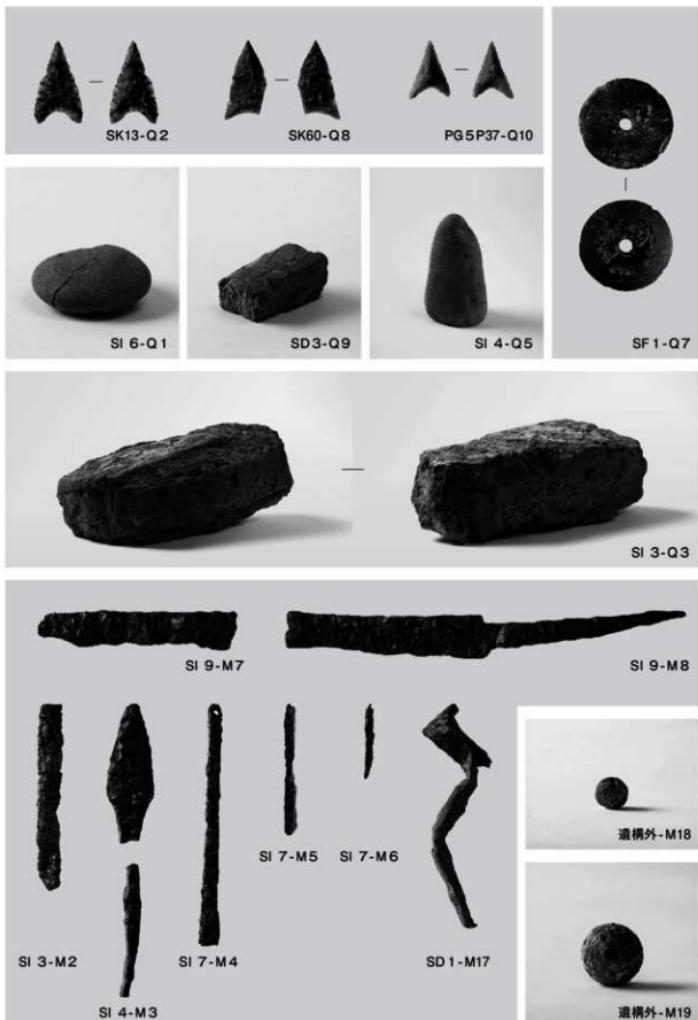


第4·5·7·9·12号竖穴建物跡，第1号道路跡，第3号溝跡出土土器

PL10



第1・4・12号竪穴建物跡、第46号土坑、遺構外出土遺物



第3・4・6・7・9号竪穴建物跡、第1号道路跡、第13・60号土坑、第1・3号溝跡、第5号ビックト群、遺構外出土遺物

PL12



第3・9・12号竖穴建物跡、第73号土坑、遺構外出土遺物

## 抄 錄

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 10  
Home Premium ServicePack1  
編集 Adobe InDesign CS6  
図版作成 Adobe Illustrator CS5  
写真調整 Adobe Photoshop CS6  
Scanning EPSON GT-X980  
国面類 RICOH imagio MP W4001  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第417集

### 六 方 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年 3月15日 印刷  
平成29（2017）年 3月17日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
H.P. <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社  
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2  
TEL 029-231-4241



